八調の順序并に主日の早課福音經誦讀の次第

第一の表柱は聖使徒ペトル、パワェルの齋の第一の主日に始まる。

第一調	早課の福音經	第　二
第二調	早課の福音經	第　三
第三調	早課の福音經	第　四
第四調	早課の福音經	第　五
第五調	早課の福音經	第　六
第六調	早課の福音經	第　七
第七調	早課の福音經	第　八
第八調	早課の福音經	第　九

第二の表柱は聖預言者イリヤの日の後に始まる。

第一調	早課の福音經	第　十
第二調	早課の福音經	第十一
第三調	早課の福音經	第　一
第四調	早課の福音經	第　二
第五調	早課の福音經	第　三

第六調	早課の福音經	第　四
第七調	早課の福音經	第　五
第八調	早課の福音經	第　六

第三の表柱は聖十字架の擧榮の後に始まる。

第一調	早課の福音經	第　七
第二調	早課の福音經	第　八
第三調	早課の福音經	第　九
第四調	早課の福音經	第　十
第五調	早課の福音經	第十一
第六調	早課の福音經	第　一
第七調	早課の福音經	第　二
第八調	早課の福音經	第　三

第四の表桂は主の降誕祭の齋期内に始まる。

第一調	早課の福音經	第　四
第二調	早課の福音經	第　五
第三調	早課の福音經	第　六
第四調	早誅の福音經	第　七
霧五調	早課の福音經	第　八

第六調　　早課の福音經　　第　九
第七調　　早課の福音經　　第　十
第八調　　早課の福音經　　第十一

第五の表柱は主の洗禮祭の後に始まる。

第一調　　早課の福音經　　第　一
第二調　　早課の福音經　　第　二
第三調　　早課の福音經　　第　三
第四調　　早課の福音經　　第　四
第五調　　早誅の福音經　　第　五
第大調　　早課の福音經　　第　六
第七調　　早課の福音經　　第　七
第八調　　早課の福音經　　第　八

第六の表柱は聖大齋期内に始まる。

第一詞　　早課の福音經　　第　九

八調の順序并に早課福音の次第　　三

八調の順序并に早課福音の次第　　四

第二調　　早課の福音經　　第　十
第三調　　早課の福音經　　第十一
第四調　　早課の福音經　　第　一
第五調　　早課の福音經　　第　二
第六調　　早課の福音經　　第　三
第七調　　早課の福音經　　第　四
第八調　　早課の福音經　　第　五

～～～～～～～～～～

主日の差遣詞及び早課の自調詞即福音の讃頌

早課の讃頌は帝レヲの作、差遣詞は其子コンスタンティン帝の作なり。

第一の差遣詞

我等は門徒と偕にガリレヤの山に登りて、信を以てハリストスが天上地下の權を受けしことを言ふを見、其如何に萬民に父と、子と、聖神との名に因りて洗を授くるを教へ、又機密者と偕に世の終末まで在らんことを約し給ふを學ばん。

生神女讃詞

生神童貞女よ、爾はハリストスが、其嘗て言ひし如く、三日目に墓より復活せしを見て、門徒と偕に喜び給へり。主は彼等に現れて、最上の教を授け、且之を説き明し、父と、子と、聖神との名に因りて洗を授くるを命じ、我等に其復活を信じ、又爾を、少女

よ、讃榮せんことを諭し給へり。

早課の讃頌、第一調。

門徒は山に往き、主は地より升らんとする前に現れしに、彼等は之に伏拜して、一切の權の彼に授けられしを聞き、其死よりの復活と天に升ることとを傳へん爲に彼より天下に遣されたり。 僞 なきハリストス神、我等の 靈 の救主は世世に彼等と俱に居らんことを約し給へり。

第二の 差遣詞

石の移されしを見たる攜香女は喜べり、蓋少者が墓の中に坐せるを見しに、彼は之に謂へり、視よ、ハリストスは興きたり、其門徒及びペトルに語げて言へ、急ぎてガリレヤの山に往け、彼は彼處に於て爾等に現れん、嘗て其友に預言せしが如し。

生神女讃詞

ハリストスよ、天使は爾が未妊まれざる先に童貞女に慶べよを攜へ、天使は又爾の墓の石を移せり。彼は 哀 に代へて言ひ難き 喜 を示し、此は死に代へて爾生命を賜ふ主を傳へ、爾を讃揚して、女等及び機密者に復活を語げたり。

早課の讃頌、第二調。

マリヤと偕に來りし香料を攜ふる女等は何如に其望を行はんと惑へるに、石の已に移されしを見、神聖なる少者は現れて、彼等の 靈 の驚騷を鎮めて云ふ、主イイススは起きたり。故に傳道者たる彼の門徒にガリレヤに疾く往きて、彼が生命を賜ふ者及び主として死より復活せしを見るべきを傳へよ。

第三の 差遣詞

ハリストスの復活せしことは誰も信ぜざるべからず、蓋彼はマリヤに現れ、後に村に往く者に見られたり、又十一の機密者に其席坐の間に現れて、彼等を洗を授けん爲に遣して、天に升り、彼處より降りて、多くの 休徵 を以て傳道を固め給ふ。

生神女讃詞

婚筵の宮より新娶者の出づるが如く、今日墓より輝き出でたる日、地獄を擄にし、死を虛しくせし主よ、爾を生みし者の祈祷に由りて、我等に光を降し給へ、心と 靈 とを照す光、衆人を爾の 戒 の途及び平安の道を行くに向はしむる光なり。

早課の讃頌、第三調。

救世主の死よりの復活と顯見とを福音する「マグダリナ」マリヤを信ぜざる門徒は心の 頑 なるを責められたれども、 休徵 と奇跡とを具足せられて、傳道の爲に遣されたり。其後爾は、主よ、原始の光なる父に升り、彼等は徧く言を傳へて、奇跡を以て之を證せり。故に人を愛する主よ、彼等に照されて、我等は爾の死よりの復活を讃榮す。

第四の 差遣詞

我等は諸徳に飾られて、生を施す墓の中に衣の光れる人の立ち、攜香女が面を地に伏せたるを見て、天を司る主の復活を知り、ペトルと偕に生命の墓に趨り、成りし事を奇として、ハリストスを仰ぎ見るべし。

生神女讃詞

慶べよと言ひし主よ、爾は原祖の悲を變じて、爾の復活の喜を世に入れ給へり。故に生を施す主よ、爾を生みし者に因りて、心を照す復活の光、爾の慈憐の光を我等に遣して、爾に呼ばしめ給へ、人を愛する神人よ、光榮は爾の復活に歸す。

早課の讃頌、第四調。

ハリストスよ、朝甚早く女等は爾の墓に來りしに、其慕へる屍を見ざりき。之が爲に惑へる時、輝ける衣を衣たる者は彼等の前に立ちて云へり、何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる、彼は預言ひし如く復活せり、何ぞ其言を憶はざると。彼等は信じて、見しことを傳へたれども、其福音は空言とせられたり、斯く門徒は尚心の遲き者たりき。然れどもペトルは趨り往きて見て、心の中に爾の奇跡を讃榮せり。

第五の差遣詞

生命及び道なるハリストスは死より復活して、クレオパ及びルカと偕に旅して、エムマウスに於て餅を擘く時彼等に知られたり。主が途中彼等と語り、苦を受けし事の聖書に應へるを明しし時、彼等の靈と心とは燃えたり。我衆彼等と偕に呼ぶ、主は實に復活せり、ペトルにも現れたり。

生神女讃詞

我が造成主よ、我爾の無量の仁慈を歌ふ、蓋爾は墮落せし人性を受けて、之を救はん爲に己を罄せり。至りて宏恩なる主宰よ、爾は神として甘じて潔き神女より身を取り、我と侔しき者と爲りて、地獄にまで降り給へり、爾を生みし者の祈祷に因りて我を救はんと欲したればなり。

早課の讃頌．第五調。

嗚呼ハリストスよ、爾の定制は睿智なる哉。爾はペトルに獨裏布を以て爾の復活を知らしめ、ルカ及びクレオパと同行して語れり、語れども直に己を顯さず、故にイエルサリムに來りし者の中爾獨其論ずることに聊も與らざるが如きを責められたり。然れども一切を造物の益に轉ずる主よ、爾は彼等に己に關する預言を解き明し、又餅を擘く時彼等に識られたり、彼等の心は是より先にも燃えて爾を示せり。其後彼等は門徒の聚まれる時、既に明に爾の復活を傳へたり。之に由りて我等を憐

み給へ。

第六の差遣詞

救世主よ、爾は己の人性を示して、墓より復活せし後に門徒の中に立ち、彼等と偕に食ひ、彼等に悔改の洗禮を教へ、直に天の父に升り、門徒に許約せし撫恤者を遣し給へり。至聖なる神人よ、光榮は爾の復活に歸す。

生神女讃詞

至聖なる童貞女よ、萬物の造成主及び神は爾の至淨なる血より人體を受けて、我が朽壞せし性を全く新たにし、爾を産の後にも産の前の如く童貞女に止まらしめ給へり。故に我等皆信を以て爾を崇め讃めて呼ぶ、世界の女宰よ、慶べ。

早課の讃頌、第六調。

眞實の平安たるハリストスよ、爾は復活の後に爾の神聖なる平安を門徒に與へしに、彼等は懼れて、見る所は神なりと意へり。然れども爾は其 靈 の驚騒を鎮めん爲に、己の手足を彼等に示せり。彼等未だ信ぜざれば、食に與ることと、先に語りし所を憶ひ起さしむることとを以て其智識を啓きて、聖書を悟らしめたり。遂に父の許約せし者を遣さんことを約し、彼等を祝福して、離れて天に升り給へり。故に彼等と偕に我等爾に伏拜す。主よ、光榮は爾に歸す。

第七の 差遣詞

主を取れりとマリヤは言ひしに、シモン ペトル及び他の機密者、ハリストスの愛せし者は墓に趨れり、二人趨り附きて惟布のみ墓の中に置き、又首を裹みし巾の別に置けるを見たり。故に尚黙してハリストスを見るに至れり。

生神女讃詞

我が大仁慈なるハリストスよ、爾は我が爲に至大至榮なることを行ひ給へり、蓋言ひ難く童貞女より生れ、十字架に釘せられ、死を忍び、光榮の中に復活して、我等の性を死より解き給へり。ハリストスよ、光榮は爾の仁慈に歸す、光榮は爾の能力に歸す。

早課の讃頌、第七調。

視よ、昧くして甚 早し。マリヤよ、何爲れぞ墓の 側 に立ち、思大く昧みて、イイススが何處に置かれたるを問ふ。趨り集れる門徒を見よ、如何にか彼等は布と首の巾とに因りて復活を曉り、又聖書に此の事の録せるを憶ひ起しし。彼等と偕に亦彼等に因りて我等も信じて、爾 生 を賜ふハリストスを讃め歌ふ。

第八の 差遣詞

マリヤは二の天を墓の中に見て驚けり、又ハリストスなるを知らずして、園丁なりと意ひて、主よ、爾は我がイイススの 屍 を何處に置きたると問へり。然れども其呼ぶ聲に因りて救世主 親 なりと知りて、聞けり、我に捫る勿れ、我父に升ると我が兄弟に告げよ。

生神女讃詞

童貞女よ、爾は言ひ難く聖三者の一を生み給へり、彼は二の性と二の行動とを有つ一位なる主なり。女宰生神女よ、常に彼に信を以て爾に伏拜する者を凡の敵の悪謀より救はんことを祈り給へ、我等皆今爾に趨り附けばなり。

早課の讃頌、第八調。

マリヤの熱き涙の注がるるは徒然にあらず、蓋視よ、教ふる天使に遇ひ、イイスス親を見るを獲たり、然れども弱き女として、亦地上の事を思ふ、故にハリストスに捫るを許されず。唯傳教女として爾の門徒に遣されて之に福音を攜へ、爾が父の嗣業に升るを告ぐ。主宰主よ、彼と偕に我等をも爾の顯見に勝へさせ給へ。

第九の　差遣詞

主宰よ、門閉ぢたるに、爾は使徒の處に入り、平安を與へ、氣を噓きて彼等を至聖神に滿て、罪を縛り及び釋く權を授け、又八日を越えて爾の脅及び手をフォマに示し給へり。我等は彼と偕に呼ぶ、爾は主及び神なり。

生神女讃詞

神の聘女、至聖なる童貞女よ、爾は己の子の三日目に墓より復活せしを見て、其苦を受くるを見し時に母として抱きたる憂を悉く解き、喜に滿たされて、其門徒と偕に彼を尊みて歌へり。求む、今爾を生神女として承け認むる者を救ひ給へ。

早課の讃頌、第五調

ハリストスよ、爾は末の時、七日の首の日既に暮れて、爾の友に現れて立ち、閉ぢたる門を過りし奇跡を以て爾の死よりの復活の奇跡を證し、門徒を喜に滿て、之に聖神を賜ひ、諸罪を赦す權を授け、フォマにも不信の激浪に沈むことを許さざりき。仁慈なる主よ、我等にも眞の智慧及び諸罪の赦を與へ給へ。

第十の　差遣詞

ティワェリアダの海に昔ゼワェデイの二子、ナファナイル及びペトル、フォマ及び他の二人漁せしに、ハリストスの命に由りて網を舟の右に施したれば、多くの魚を獲たり、ペトル主を知りて彼に濟れり。斯く主は其門徒に第三次に現れて、之に燃ゆ

る火の上に餅及び魚を示し給へり。

生神女讃詞

生神童貞女よ、爾を歌ひ、愛を以て讃美する者の爲に三日目に墓より復活せし主に祈り給へ、蓋我等皆爾を救の避所及び主の前の轉達者として有つ、皆爾の嗣業及び諸僕として爾の保護を仰げばなり。

早課の讃頌、第六調。

ハリストス救世主よ、爾が地獄に降り、又死より復活せし後、門徒は爾に別るるを憂ふるに因りて、仍舊業に循ひて舟に登り、網を施ししに、魚なかりき。然れども爾現れて、萬物の主宰として、網を舟の右に施すを命じたれば、言は忽行はれて、多

くの魚は獲られ、且奇妙なる晩餐は地上に備はりて、爾の門徒は其時之に與れり。人を愛する主よ、今我等にも靈智を以て之を樂しむを得しめ給へ。

第十一の 差遣詞

主は神聖なる復活の後に三たびペトルに我を愛するかと問ひて己の羊の牧首と爲せり。彼はイイススの愛せし所の者の後に從ふを見て、主宰に問へり、斯の人は如何。答へて曰へり、我若し彼が存して、我が來るを待つことを欲せば、友ペトルよ、爾と何ぞ與らん。

生神女讃詞

嗚呼威嚴なる秘密、嗚呼至榮なる奇跡や、死を以て死は全く滅されたり。言よ、誰か歌はざらん、誰か爾の復活と、潔く爾を身にて生みし生神女とに伏拜せざらん。彼の祈祷に因りて衆を「ゲエンナ」より救ひ給へ。

早課の讃頌、第八調。

救世主よ、爾は復活の後に爾の門徒に現れて、シモンに其愛の報として羊を牧せしめて、羊群の事を慮るを促せり。故に曰へり、ペトルよ、爾若し我を愛せば、我が羔を牧せよ、我が羊を牧せよ。彼は直に友を愛する心を示して、他の門徒の事を問へり。ハリストスよ、彼等の祈祷に因りて、爾の群を之を滅さんと欲する狼より護り給へ。

～～～～～～～～～～

主日の差遣詞及び早課の福音の讃頌　一五
主日の早課福音經　一六

主日の早課の福音經

第一の主日の福音經、マトフェイ百十六端。

彼の時十一の門徒ガリレヤに往きて、イイススの彼等に命ぜし山に至り、彼を見て拜せり、然れども猶疑へる者ありき。イイスス就きて、彼等に語げて曰へり、天に在り地に在る一切の權は我に與へられたり、故に爾等往きて、萬民に教を傳へて、彼等に父と子と聖神との名に因りて洗を授け、彼等を教へて、我が一切爾等に命ぜしことを守らしめよ、視よ、我恒に爾等と偕にして世の終末まで在るなり、「アミン」。

第二の主日の福音經、マルコ七十端。

彼の時安息日過ぎて、マリヤ「マグダリナ」、イアコフの母マリヤ、及びサロミヤ、香料を買ひたり、往きてイイススに膏らん爲なり。七日の首の日甚早く、墓に來る、日の出づる頃なり、相語りて曰へり、誰が我等の爲に石を墓の門より移さん。目を擧げて、石の已に移されたるを見る、蓋其石は甚大なり。彼等墓に入りて、白衣を衣たる少者が右の方に坐せるを見て駭けり。彼は之に謂ふ、駭く勿れ、爾等は十字架に釘せられしナザレトのイイススを尋ぬ、彼は復活して、此に在らず、觀よ、此は彼

を置きし處なり。往きて、其門徒及びペトルに語げて言へ、彼は爾等に先だちてガリレヤに往く、爾等彼處に於て彼を見ん、其爾等に言ひしが如しと。婦急ぎ出でて、墓より奔り、戰き且つ驚きて、一言も人に語げざりき、懼れしが故なり。

第三の主日の福音經、マルコ七十一端。

彼の時七日の首の日朝早く、イイスス復活して先づマリヤ「マグダリナ」、即其曾て七の魔鬼を逐ひ出しし所の者に現れたり。婦往きて、先に彼と偕に在りし哀み哭ける者に告げたれども、彼等其生きて、之に見られたりと聞きて、信ぜざりき。其後彼等の中の二人が村に往く時、イイスス變りたる容を以て之に途に現れたり。二人返りて、餘の者に告げしに、彼等をも信ぜざりき。卒に十一門徒に其席坐の間に現れて、其信なきと心の頑なるとを責めたり、彼の復活したるを見し者を信ぜざりし故なり。又彼等に謂へり、全世界に往きて、福音を悉くの受造物に傳へよ、信じて洗を受くる者は救はれ、信ぜざる者は罪に定められん。信ずる者には斯の休徴は從はん、我が名に因りて魔鬼を逐ひ出し、新なる方言を言ひ、蛇を操り、毒を飲むとも、彼等を害せざらん、手を病者に按せば、愈ゆるを得ん。主は彼等に語りし後天に升り、神の右に坐せり。彼等は出でて、四方に教を傳へ、主は彼等を相け、之に從ふ休徴を以て其言を固めたり、「アミン」。

第四の主日の福音經、ルカ百十二端。

彼の時七日の首の日、朝甚早く、婦等は備へたる香料を攜へて、墓に來れり、他の婦も彼等と偕にせり。石の墓より移されたるを見、入りて、主イイススの屍を見ざりき。之が爲に惑へる時、視よ、輝ける衣を衣たる二人彼等の前に立てり。彼等懼れて、面を地に伏せたれば、二人之に謂へり、何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる。彼は此に在らず、乃復活せり、彼が尚ガリレヤに在りし時、如何に爾等に語げて、人の子が罪人の手に付され、十字架に釘せられ、第三日に復活すべきことを云ひしを憶へ。彼等其言を憶ひ起し、墓より歸りて、悉く此を十一門徒及び其餘の者に告げたり。使徒に之を告げたる者は、「マグダリナ」マリヤ、イオアンナ、イアコフの母マリヤ、及び其他彼等と偕に在りし者なり。使徒は彼等の言を空言と爲して、之を信ぜざりき。然れどもペトル起ちて、墓に趨り往き、俯して、惟裹布の置けるを見、其成りし事を心に異みて歸れり。

第五の主日の福音經、ルカ百十三端。

彼の時ペトル起ちて、墓に趨り往き、俯して、惟裹布の置けるを見、其成りし事を心に異みて歸れり。是の日其中の二人、イエルサリムを去ること約六十小里なるエムマウスと名づくる村に往きしが、互に凡そ此等の有りし事を語れり。語り且論ずる時、イイスス親ら近づきて、彼等と偕に行けり。然れども二人の目は捉められて、彼を識らざるを致せり。彼曰へり、爾等は行きて何事をか互に論じ、又何ぞ憂ふる色ある。

其一人クレヲパと名づくる者、彼に對へて曰へり、イエルサリムに來りし者の中、爾獨近日其中に成りし事を知らざるか。問ひて曰へり、何の事ぞ。彼等曰へり、イイスス ナゾレイ、即神及び衆民の前に行と言とに能力ある預言者たりし者に在りし事、如何に我等の司祭諸長及び有司等が彼を解して、死に定め、十字架に釘せし事なり。我等は嘗て此の人はイズライリを贖ふべき者なりと望めり、然れども此れ皆成りしより今已に第三日なり。然るに又我等の中の或婦等は我等を驚かせり、彼等朝早く墓に在りしが、其屍を見ずして、來りて、天使等の現れて、彼は生くと言ふを見しことを語げたり。我等の中の數人墓に適きしに、果して婦の言ひし如き事を見たり、惟彼を見ざりき。イイスス彼等に謂へり、噫無知にして、凡そ諸預言者の言ひし事を信ずるに心の遲き者よ、ハリストスは此くの如く苦を受けて、其光榮に入るべかりしに非ずや。是に於てモイセイより始めて、諸預言者に及ぶまで、凡そ聖書

に彼を指して載することを彼等に説き明せり。往く所の村に近づきしに、彼は尚遠く行かんとする者の若し。二人彼を留めて曰へり、我等と偕に止れ、蓋時暮れんとし、日已に昃けり。彼入りて、偕に止れり。席坐せる時、彼餅を取りて、祝福し、擘きて彼等に與へたり。其時二人目啓けて、彼を識れり、而して彼忽見えずなりき。彼等互に言へり、途中彼が我等と語り、且我等に聖書を解き明しし時、我等の心我が衷に燃えしに非ずや。即時に起ちて、イエルサリムに歸り、十一門徒及び之と偕に聚れる者に遇へり。僉言ふ、主は實に復活せり、而してシモンに現れたり。二人も亦途中に在りし事、及び如何に其餅を擘く時彼等に識られし事を述べたり。

第六の主日の福音經ルカ百十四端。

彼の時イイスス死より復活し、其門徒の中に立ちて曰へり、爾等に平安。彼等驚き且懼れて見る所は神なりと意へり。イイスス彼等に謂へり、何ぞ懼れ惑ふ、胡爲れぞ此の意は爾等の心に起れる。我が手我が足を視よ．是我自なり、我に捫りて視よ、蓋神には骨肉なし、其我に有るを見るが如し。此を言ひて、手足を彼等に示せり。彼等喜に因りて、猶未だ信ぜず、且異める時、彼曰へり、此に食ふべき物あるか。彼等は炙りたる魚一片と蜜房とを彼に與へたれば、取りて、彼等の前に食へり。又彼等に謂へり、我猶爾等と偕に在りし時、爾等に語りて、モイセイの律法、諸預言者及び聖詠に、我を指して録されし事、皆應ふべしと云ひしは、乃是なり。其時彼等の智識を啓きて、聖書を悟らしめたり。又彼等に謂へり、斯く録されたり、而して斯くハリストスは苦を受け、第三日に死より復活すべかりき、且其名に因りて、悔改と諸罪の赦とは、イエルサリムより始めて、萬民に傳へらるべきなり。爾等は此等の事の證者なり。視よ、我は我が父の許約せし者を爾等に遣さん、爾等イエルサリムの城に居りて、上より能力を衣するに迄れ。イイスス彼等を外に率いて、ワィファニヤに至り、手を擧げて彼等に祝福せり。祝福する時、彼等を離れ、擧げられ

て、天に升れり。彼等之を拜し、大に喜びて、イエルサリムに歸り、恒に殿に在りて、神を頌美祝讃せり、「アミン」。

第七の主日の福音經イオアン六十三端。

彼の時七日の首の日、朝尚昧きに、マリヤ「マグダリナ」墓に來りて、石の墓より移されたるを見る。故に趨りて、シモン ペトル及びイイススの愛せし他の門徒に來りて、彼等に謂ふ、人主を墓より取れり、我等其何處に彼を置きしを知らず。ペトル及び他の門徒出でて、墓に往けり。二人共に趨りしが、他の門徒はペトルより疾く趨りて、先に墓に來れり。俯して、布の置けるを見たれども、入らざりき。シモン ペトル彼に次ぎて來り、墓に入りて、布の置けるを見、又其首を裹みし巾の、布と共に在

らず、乃捲きて、別に他の處に置けるを見たり。其時先に墓に來りし他の門徒も入りて見、而して信ぜり。蓋彼等は未だ其死より復活すべき事の、聖書に載せたるを知らざりき。是に於て二の門徒復己の所に歸れり。

第八の主日の福音經イオアン六十四端。

彼の時マリヤは墓の外に立ちて哭けり。哭く時墓に俯して、二の天使が、白衣にしてイイススの屍の置かれし處に、一は首に一は足に坐せるを見る。彼等之に謂ふ、婦よ、何ぞ哭ける。彼曰く、人我が主を取れり、我其何處に彼を置きしを知らず。此を言ひて、顧みて、イイススの立てるを見る、然れども其イイススなるを知らざりき。イイスス彼に謂ふ、婦よ、何ぞ哭ける、誰を尋ぬるか。婦は園丁なりと意ひて、之に謂ふ、君よ、若し爾彼を移ししならば、何處に置きしを我に告げよ、我彼を取らん。イイスス之に謂ふ、マリヤよ、婦顧みて彼に謂ふ、「ラウゥワニ」、譯すれば夫子なり。イイスス之に謂ふ、我に捫る勿れ、蓋我未だ我が父に升らざりき、乃往きて、我が兄弟に告げて曰へ、我は我が父及び爾等の父、我が神及び爾等の神に升ると。マリヤ「マグダリナ」往きて門徒に己が主を見しこと、及び其彼に之を言ひしことを告げたり。

第九の主日の福音經イオアン六十五端。

彼の日即七日の首の日、既に暮れて、門徒の集れる處の門、イウデヤ人を懼るるに因りて、閉ぢたるに、イイスス來りて、中に立ちて、彼等に謂ふ、爾等に平安。此を言ひて、彼等に己の手足及び脅を示せり。門徒主を見て喜べり。イイスス復彼等に謂へり、爾等に平安、父が我を遣しし如く、我も亦爾等を遣す。此を言ひて、氣を噓きて、彼等に謂ふ、聖神を受けよ。爾等人に其罪を釋さば、則釋さる、人に其罪を留めば、則留めらる。イイススの來りし時、十二の一なるフォマ、稱してディディムと云ふ者、彼等と偕に在らざりき。他の門徒彼に謂へり、我等主を見たり。然れども彼は之に謂へり、我若し其手に釘の迹を見ず、我が指を釘の迹に入れず、我が手を其脅に入れずば、信ぜざらん。八日を越えて、門徒復内に在り、フォマも彼等と偕

にせり。門閉ぢたるに、イイスス來りて、彼等の中に立ちて曰へり、爾等に平安。次ぎてフォマに謂ふ、爾の指を此に伸べて、我が手を視よ、爾の手を伸べて、我が脅に入れよ、信ぜざる勿れ、乃信ぜよ。フォマ答へて彼に謂へり、我が主よ、我が神よ。イイスス彼に謂ふ、爾は我を見しに縁りて信ぜり、見ずして信ずる者は福なり。イイススは其門徒の前に於て、亦他の多くの奇蹟、此の書に載せざる者を行へり。此を載せたるは、爾等がイイススは神の子、ハリストスなりと信じ、且信じて、其名

に因りて生命を得ん爲なり。

第十の主日の福音經イオアン六十六端。

彼の時イイスス其門徒にティワェリアダの海濱に現れたり。其現れたること左の如し。シモン ペトル、フォマ、稱してディディムと云ふ者、ガリレヤのカナのナファナイル、ゼワェデイの二子、及び他の二人の門徒共に在り。シモン ペトル彼等に謂ふ、我往きて漁せん。彼等曰ふ、我等も爾と偕に往かん。出でて、直に舟に登りしが、是の夜は獲る所なかりき。既に明けて、イイスス岸に立てり、然るに門徒は其イイススたるを知らざりき。イイスス彼等に謂ふ、小子よ、爾等に食ふべき物あるか。彼等答へて曰へり、無し。彼は之に謂へり、網を舟の右に施せ、然らば得ん。彼等施ししに、之を擧ぐること能はざりき、魚の多き故なり。時にイイススの愛せし所の門徒ペトルに謂ふ、是れ主なり。シモン ペトル是れ主なりと聞きて、裸なりしに因りて衣を束ねて、海に投ぜり。他の門徒は舟に乘り、魚の盈てる網を曳きて至れり、蓋地を離るること遠からず、約二百尺なり。地に上りし時、燃えたる火其上に置きたる魚及び餅あるを見る。イイスス彼等に謂ふ、今爾等が獲たる魚數尾を攜へ來れ。シモン ペトル往きて、網を地に曳き上げたり、中に大なる魚一百五十三尾盈てり、斯く多しと雖、網は裂げざりき。イイスス彼等に謂ふ、來りて食せよ。門徒一も、爾は誰たると、問ふことを敢てせざりき、其主たるを知ればなり。イイスス前みて、餅を取りて、彼等に與ふ、魚も亦然り。イイススが死より復活して後、其門徒に現れしこと、此れ其三なり。

第十一の主日の福音經イオアン六十七端。

彼の時イイスス死より復活して後、其門徒に現はれて、シモン ペトルに謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること彼等に過ぎたるか。彼曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羔を牧せよ。又第二次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。第三次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル第三次に、爾我を愛するかと、謂ひしに因りて、憂ひて、彼に謂へり、主よ、爾は知らざる所なし、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。我誠に誠に爾に語ぐ、爾少き時に於て、自ら帶

を束ねて、欲する所に行けり、老ゆるに及びて、爾の手を伸べん、他人爾を束ねて、爾が欲せざる所に曳かん。此を言ひしは、ペトルが若何なる死を以て、神を榮せんとするを示せるなり。言ひ竟りて、又彼に謂ふ、我に從へ。ペトル顧みて、イイススの愛せし所の門徒の後に從ふを見る、即晩餐の時、イイススの胸に倚りて、主よ、

爾を賣る者は誰ぞと、云ひし者なり。ペトル彼を見て、イイススに謂ふ、主よ斯の人は如何に。イイスス彼に謂ふ、我若し彼が存して、我が來るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與らん、爾我に從へ。是に於て此の言は兄弟の間に散じて、此の門徒は死せざらんと言へり。然れどもイイススは彼に、死せざらんと言ひしに非ず、乃我若し彼が存して、我が來るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與からんと、言ひしなり。此等の事を證し、且之を書しし者は、即此の門徒なり、我等は彼の證の眞なるを知る。イイススの行ひし事、他に亦多く有り、若し一一之を書さば、我意ふ、其書は世載するに勝へざらん、「アミン」。

平日の光耀歌

光耀歌の中に日毎に左の詞を挿入す。

月曜日に、爾の無形の者の轉達に因りて、……我を救ひ給へ。
火曜日に、爾の前驅の祈祷に因りて、主よ、……我を救ひ給へ。
水曜日及び金曜日に、爾の十字架の力にて、主よ、……我を救ひ給へ。
木曜日に、爾の諸使徒、及び成聖者ニコライの祈祷に因りて、主よ……
……我を救ひ給へ。

「スボタ」に二句あり。

第一句に、爾の諸聖人の祈祷に因りて、主よ、……我を救ひ給へ。
第二句に、生神女の祈祷に因りて、主よ……我を救ひ給へ。

光耀歌、調に循ひて歌ふこと三次。

光耀歌、第一調。

主よ、光を耀かし、爾の無形の者の轉達に因りて、我が靈を諸の罪より淨めて我を救ひ給へ。

第二調。

ハリストス神よ、爾の永在の光を遣し、爾の無形の者の轉達に因りて、我が心の無形の目を照して、我を救ひ給へ。

第三調

ハリストス神よ、爾の光を遣し、爾の無形の者の轉達に因りて、我ば心を照して、我

を救ひ給へ。

第四調

主よ、爾の世界に光を耀かし、爾の無形の者の轉達に因りて、幽暗に在る我が靈を諸の罪より潔めて、我を救ひ給へ。

第五調

光を施す主よ、爾の光を遣し、爾の無形の者の轉達に因りて、我が心を照して、我を救ひ給へ。

第六調

主よ、爾の無形の者の轉達に因りて、爾の永在の光を我等の靈に遣し給へ。

第七調

主よ、我を起して爾を歌はしめ、聖なる者よ、爾の無形の者の轉達に因りて、我に爾の旨を行はんことを教へて、我を救ひ給へ。

第八調

光なるハリストスよ、爾の無形の者の轉達に因りて、親ら我を照して、我を救ひ給へ。

～～～～～～～～～～

平日の差遣詞（エクサポスティラリイ）、自調。

月曜日

神として星を以て天を飾り、爾の諸天使を以て全地を照しし萬有の造成主よ、爾を歌ふ者を救ひ給へ。

生神女讃詞

諸天使の樂、憂ふる者の喜、「ハリスティアニン」等の轉達者たる童貞女、主の母よ、我等を護りて、永遠の苦より救ひ給へ。

火曜日

我等皆救世主の前驅及び授洗者イオアン、預言者の中の預言者、野の養育、エリサワェタの産を崇め讃めん。

生神女讃詞、「諸天使の樂」。月曜日と同じ。

水曜日及び金曜日

十字架は全世界の守護、十字架は教會の裝飾、十字架は諸王の權柄、十字架は信者の防固、十字架は諸天使の光榮及び諸悪鬼の苦痛なり。

十字架生神女讃詞

爾を種なく生みし者は十字架の側に立ちて、哭きて呼べり、嗚呼甘愛なる子よ、如何

ぞ爾は吾が目より隠れたる、如何ぞ死者の中に算へられたる。

木曜日

救世主の使徒よ、爾等は普天下に出でて、實にハリストスが聖なる童貞女より人體を取りしことを傳へて、異邦民を迷より轉ぜしめ、之を照して、衆人に聖なる三者を尊まんことを教へ給へり。

又

我等皆大なる牧師長及び成聖者ミラ　リキヤの首座たるニコライを崇め讃めん、蓋彼は非義に死に定められたる多くの者を救ひ、王及びアウラワィイに夢に現れて、非義の定罪を釋き給へり。

生神女讃詞

至淨なるマリヤ、金の香爐、容れられぬ神性の器と爲りし少女よ、父は爾を愛し、子は爾の内に入り、聖神は爾に臨みて、生神女と爲し給へり。

「スボタ」

神として死者と生者とを司り、爾の諸聖人を以て全地を照しし萬有の造成主よ、爾を歌ふ者を救ひ給へ。

生神女讃詞

生神女よ、我等は爾を以て誇り、爾を神の前に轉達として有つ。爾の勝たれぬ手を舒べて、我等の諸敵を破りて、爾の諸僕に聖所より助を遣し給へ。

～～～～～～～～～～

聖三讃歌。グリゴリイ シナイトの作。

毎主日の夜半課に聖三者の規程の後に之を歌ふ。

爾神言を讃榮するは誠に當れり。我等畏を以てヘルワィムの戰ひ慄き、天軍の崇め歌ふ三日目に墓より復活せしハリストス、生命を賜ふ主を讃榮せん。

我等皆神に適ふ神聖なる歌を以て父と、子と、聖神三位の權柄、惟一の國及び宰制を讃め歌はん。

地上の諸族に歌はれ、天上の諸軍に尊まれ、萬有より忠信に拜まるる性に於て一にして、位に於て三なる神を讃め揚げん。

ヘルワィムを宰る主、セラフィムを治むる神、分れざる三者、惟一の神性を崇め讃めん。

無原の神父、同無原の言、及び聖神に叩拜し、相離れざる合一の神性、三位の惟一者

を歌を以て尊まん。

吾が神、三位の主、造成主よ、爾の輝ける電にて我を照し、我を爾の近づき難き光榮の明るくして光れる變らざる家と爲し給へ。

我等畏を以てヘルワィムの戰ひ慄き、天使の軍の崇め歌ひ、童貞女より言ひ難く身を取りしハリストス、生命を賜ふ主を讃榮せん。

次ぎて聖三祝文、「天に在す」の後に本調の應答歌。主憐めよ、四十次。光榮、今も、「ヘルワィムより尊く」。司祭高聲、「神よ、我等に恩を被らせ」。

司祭左の祝文を誦す。

全能にして生を施し、光を賜ふ聖なる三者、己の仁慈に因りて見ゆると見えざるとの世界の萬物を無より有と爲し、之を慮り之を護り、我等地上の人類に於ける爾の言ひ難き多種の恩惠の外に、亦我が肉體の不能に由りて我等に死に至るまで益用すべき痛悔を賜ひし主よ、我等不當の者が我が悪しき行の中に死し、悪の魁、嫉妬者及び殘害者の嘲と爲るを許す勿れ。慈憐なる主よ、爾は彼が我等に於ける悪謀と仇讎との如何なる、又我等の眈慾と、柔弱と、怠慢との如何なるを知る。然れども我等毎日毎時尊くして生を施す誠に逆ふを以て爾を怒らしむる者は祈る、爾の盡きざる仁慈を我等に垂れ給へ。我が過ぎ去りし生命の今の時に至るまで行、或は言、或は思の中に犯しし諸罪を問はずして恕し給へ、我等に生命の餘日を痛悔と、傷感と、

爾の聖なる誡を守ることとを以て送らしめ給へ。我等若し逸樂に誘はれて種種の罪を犯し、或は不潔有害なる慾に迷はされて罪に陥り、若し無知なる怒と憤とに動かされて吾が兄弟を侵し、若し舌を以て脱し難き網に罹り、若し一の感覺或は凡ての感覺を以て、自由に或は不自由に、知りて或は知らずして、誘はれ或は勸められて、無知にして躓き、若し悪念及び空想を以て良心を汚し、若し悪しき習慣に引かれ、或は他の縁由に依りて罪に陥りしならば、至仁宏恩にして慈憐の無量なる主よ、盡く之を我等に赦して、之を釋き給へ。是より後我等に爾の善にして悦ぶべき純全なる旨を行はん爲に奮勵と能力とを與へ給へ、我等不當の者が光明なる痛悔を以て夜の闇黒なる悪を免れ、晝に在るが如く行を美しくして、潔き者として爾の仁愛の前に立ち、世世に爾を歌頌して崇め讃めん爲なり、「アミン」。

發放詞、并に通例の相互の謝罪。

次に司祭聯祷を誦す。

吾が今上皇帝の爲に祷らん云云　我等微聲を以て徐に歌ふ、主憐めよ。已に畢りて司

グリゴリイ、シナイトの聖三讃歌　三九

復活讃詞　四〇

祭誦す、主イイスス ハリストス我等の神よ、吾が諸聖神父の祈祷に因りて我等を憐み給へ、「アミン」。

～～～～～～～～～～

復活讃詞

年中主日に「ネポロチニ」の後に歌ふ所。第五調。

讃詞毎に左の句を附唱す。

主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誡を我に訓へ給へ。
救世主よ、天使の軍は爾が死者の内に入れど、死の力を亾し、アダムを己と共に起し、衆を地獄より救ひ給ひしを見て驚けり。
主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誡を我に訓へ給へ。
墓の中に光る天使は攜香女に謂へり、女弟子よ、何ぞ香料を悲の涙に交ふる、墓を見て悟れよ、救世主は墓より復活せり。
主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誡を我に訓へ給へ。
攜香女は朝早く泣きて爾の墓に往きしに、天使其前に立ちて云へり、泣く時は過ぎたり、涙を止めて、使徒に復活を告ぐべし。
主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誡を我に訓へ給へ。
救世主よ、攜香女は香料を攜へ、爾の墓に來りて泣きしに、天使之に謂へり、何ぞ生ける者を死者の中にありと思ふ、彼は神として墓より復活せり。

光榮、三者讃詞。

父と、其子と聖神、一體の聖三者を拜みて、セラフィムと偕に呼ばん、聖、聖、聖なる哉主や。

今も、生神女讃詞。

童貞女よ、爾は生命を賜ふ主を生みて、アダムを罪より救ひ、エワに悲に易へて喜を賜へり、爾より身を取りし神人は生命を落しし者を率いて、復生命に向はせたり。

「アリルイヤ」、三次。

毎主日に讃頌の後に、光榮、福音の讃頌。

今も、生神女讃詞、第二調。

生神童貞女よ、爾は至りて讃美たる者なり、爾に身を取りし主は地獄を虜にし、アダムを喚び起し、詛を壞り、エワを釋し、死を滅し、我等を生かせり。故に我等歌ひて呼ぶ、斯く行ひ給ひしハリストス神は崇め讃めらる、光榮は爾に歸す。

平日の聖三の讃歌を八調に依りて歌ふ次第

若し「アリルイヤ」あり、或は大四旬齋ならば、大聯祷の後、本調に依りて「アリルイヤ」を歌ふこと三次。是の時左の句を誦す。

第一句、神よ、我が神は夜中より爾を慕ふ、蓋爾の誠は地に在りて光なり。

第二句、地に居る者は義を學べ。

第三句、爾の民を憎む者は辱を承けん。

第四句、主我が神よ、我等に平安を與へ給へ。

毎句「アリルイヤ」を歌ふこと三次。「アリルイヤ」畢りて後本調の聖三の讃歌を歌ふこと各一次。

聖三の讃歌、第一調。

我等無形の軍の有形の象を以て、形より上なる屬神の意思に升せられ、聖三の歌に由りて三位の神性の光を受けて、ヘルワィムの如く惟一の神に呼ばん、聖、聖、聖なる哉吾が神や、云云

光榮

我等衆天軍と偕に最高きに居る者に聖三の讃美を奉りて、ヘルワィムの如く呼ばん、聖、聖、聖なる哉吾が神や、爾の諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み給へ。

今も

至善者よ、我等寤め興きて爾に伏拜す、全能者よ、天使の歌を以て爾に呼ぶ、聖、聖、聖なる哉神や、生神女に因りて我等を憐み給へ。

第一の聖三の讃歌の末辭は何れの週間にも左の如し。

月曜日には、爾の無形軍の轉達に因りて我等を憐み給へ。

火曜日には、爾の前驅の祈祷に因りて我等を憐み給へ。

水曜日及び金曜日には、主よ、爾の十字架の力にて我等を護り給へ。

木曜日には、爾の聖使徒及び成聖者ニコライの祈祷に因りて我等を憐み給へ。

聖三の讃歌、第二調。

至善者よ、我等地に在りて天上の軍に效ひて、凱歌を爾に奉る、聖、聖、聖なる哉吾が神や、云云

光榮

造られざる性、萬有の造成主よ、我等の口を開き給へ、我が爾の讃美を傳へて呼ばん爲なり、聖、聖、聖なる哉吾が神や、爾の諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み給へ。

今も

主よ、爾は我を覺まして榻より起せり、我が智慧と心とを照し、我が口を開きて、爾聖三者を歌はしめ給へ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、生神女に因りて我等を憐み給へ。

聖三の讃歌、第三調。

一性にして分れざる三者、三位にして同永在なる惟一者よ、我等爾神に天使の歌を奉る、聖、聖、聖なる哉吾が神や、云云

光榮

無原の父、同無原の子、同永在の神たる惟一の神性を、我等ヘルワィムの如く勇敢を以て讃榮して曰ふ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、爾の諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み給へ。

今も

審判者俄に來りて、人人の行は顯れん、故に我等夜半に畏れて呼ぶ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、生神女に因りて我等を憐み給へ。

聖三の讃歌、第四調。

爾の無形なる役者の歌を、我等死すべき者は勇敢を以て爾に奉りて曰ふ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、云云

光榮

至善者よ、天使の品位が天に於ける如く、我等人の班列は地に於て今畏を以て凱歌を爾に奉る、聖、聖、聖なる哉吾が神や、爾の諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み給へ。

今も

ハリストス神よ、爾の無原なる父と、爾と、爾の至聖なる神とを、我等ヘルワィムの如く勇敢を以て讃榮して曰ふ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、生神女に因りて我等を憐み給へ。

聖三の讃歌、第五調。

歌頌の刻、祈祷の時なり、我等熱切に惟一の神に呼ばん、聖、聖、聖なる哉吾が神や、云云

光榮

無原なる三者よ、我等勇敢を以て爾の無形の軍を象りて、不當なる口にて呼ぶ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、爾の諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み給へ。

今も

童貞女の胎に入りて、父の懐を離れざりしハリストス神よ、諸天使と偕に我等をも受け給へ、蓋我等呼ぶ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、生神女に因りて我等を憐み給へ。

聖三の讃歌、第六調。

ヘルワィム等は畏を以て前に立ち、セラフィム等は敬み慄きて、黙さざる聲を以て聖三の歌を奉る、彼等と偕に我等罪なる者も呼ぶ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、云云

光榮

我が神よ、六翼の者は無形の口、黙さざる讃頌を以て爾に聖三の歌を呼ぶ、我等地上の者も不當なる口を以て爾に讃美を奉る、聖、聖、聖なる哉吾が神や、爾の諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み給へ。

今も

聖三なる惟一の神性を混淆せざる合一に於て讃榮して、我等天使の歌を呼ぶ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、生神女に因りて我等を憐み給へ。

聖三の讃歌、第七調。

天上の軍たるヘルワィム等に歌頌せられ、神聖なる光榮の中に諸天使に伏拜せらるる神よ、我等地上に在りて不當なる口を以て爾に讃美を奉る者をも納れ給へ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、云云

光榮

靈よ、眠の如く怠惰を退け、審判者を讃美せんことを勵みて、畏を以て呼ぺ、聖、聖、聖なる故吾が神や、爾の諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み給へ。

今も

近づき難き神性、惟一の三者に、セラフィムの聖三の讃美を奉りて、畏を以て呼ばん、聖、聖、聖なる哉吾が神や、生神女に因りて我等を憐み給へ。

平日の聖三の讃歌　三一

平日の光曜歌　三二

聖三の讃歌、第八調。

我等心を天に擧げ、天使の品位に效ひて、畏を以て審判者の前に俯伏して、勝利の讃美を呼ばん、聖、聖、聖なる哉吾が神や、云云

光榮

ヘルワィム等は敢て爾を仰ぎ視ずして、環り飛びて、神聖なる聖三の歌を奉る、彼等と偕に我等も爾に呼ぶ、聖、聖、聖なる哉吾が神や、爾の諸聖人の祈祷に因りて我等を憐み給へ。　今も

我等多くの罪に屈められ、敢て天の高きを仰ぎ視ずして、靈と體とを以て俯伏して、諸天使と偕に爾に歌を奉る、聖、聖、聖なる哉吾が神や、生神女に因りて我等を憐み給へ。

毎主日の使徒誦讀。コリンフ書百五十八端。

兄弟よ、我が嘗て爾等に傳へし福音を復爾等に告ぐ、仍、爾等が受けし所、之を以て立ちし所なり。爾等若し之を我が福音せし如く守り、且徒に信ずることなくば、之に由りて救を得ん。蓋我が初に爾等に傳へし所は、我自らも受けし所なり。即ハリストスは我等の罪の爲に死せり、聖書に録せるが如し、又彼は葬られ、第三日に復活せり、聖書に録せるが如し。又キファに、後十二人に現れ、其後五百餘の兄弟の共に在るに現れたり、其中多くの者は今に至るまで猶存す、已に寢りたる者もあり。其後イアコフに、又悉くの使徒に現れ、卒に我、月足らぬ如き者にも現れたり。蓋我は使徒の中に於て最小き者にして、使徒と名づけらるるに堪へず、神の教會を窘逐せしが故なり。然れども神の恩寵に由りて、我は我たるを得たり、且我に存する神の恩寵は空しからざりき、乃我は彼等衆よりも多く勞せり、然るに我に非ず、乃我と偕にする神の恩寵なり。故に我と彼等とを論ぜず、我等是くの如く傳ふ、爾等も是くの如く信ぜり。

毎主日の福音經誦讀。マトフェイ七十七端。

主は左の譬を設けて曰へり、天國は、其諸僕と會計せんと欲せし君王に似たり。會計を始めし時、一千萬金の債ある者を彼に曳き來れるあり。其償ふこと能はざるに因りて、主は彼の身と、其妻子と、其悉くの所有とを鬻ぎて、償はんことを命ぜり、其僕俯伏して、彼を拜して曰へり、主よ、我を寛うせよ、我盡く爾に償はん。其僕の主は憐みて、彼を釋ち、彼に債を免せり。其僕出でて、一人の同僚の、己に銀一百の債ある者に遇ひて、之を執へ、喉を扼めて曰へり、爾が負ふ所を我に償へ。其同僚彼の足下に俯伏して求めて曰へり、我を寛うせよ、我盡く爾に償はん。然れども彼肯はず、乃往きて、其債を償ふに至るまで、之を獄に下せり。佗の同僚之を見て、甚憂ひ、來りて有りし所を悉く主に告げたり。其時主は彼を召して曰く、悪しき僕よ、爾我に求めしに因りて、我其債を悉く爾に免せり、我が爾を憐みし如く、爾も亦爾の同僚を憐むべきに非ずや。主乃怒りて、其悉くの債を償ふに至るまで、彼を獄吏に付せり。若し爾等各其心より己の兄弟に其罪を免さずば、我が天の父も亦斯くの如く爾等に行はん。

平日の提綱、使徒誦讀、アリルイヤ、及び福音經誦讀。

主日の福音經誦讀　四三

平日の堤綱、使徒、アリルイヤ、福音經　四四

月曜日に、提綱、第四調。

爾は風を以て爾の使者と爲し、焔を以て爾の役者と爲す。

句、我が靈よ、主を讃め揚げよ、主我が神よ、爾は至りて大なり。

使徒、エウレイ書三百五端。

兄弟よ、若し．天使等に藉りて告げられし言は堅く立ちて、凡の違背と不順とは公正の報を受けしならば、我等此くの如き救を顧みずして、如何ぞ逭るるを得ん。斯れ

始主に因りて傳へられ、彼より聞きし者に因りて我等の中に堅く立てられ、神に縁りて、其旨に循ひて、休徴、奇蹟、種種の異能、及び聖神の分予を以て證せられたり。蓋神は我等が言ふ所の未來の世を天使等に服せしめしに非ず、然れども或人一篇に證して曰へり、人は何物たる、爾之を憶ふか、人の子は何物たる、爾之を顧みるか。爾彼を天使等より少しく遜らしめ、彼に光榮と尊貴とを冠らせ、彼を爾が手の造りし者の上に立て、萬物を其足下に服せしめたりと、既に萬物を彼に服せしめたれば、乃一も彼に服せざりし者を遺さざりき。然れども今我等は未だ萬物の彼に服せられしを見ず、唯我等は天使等より少しく遜らしめたるイイススが、死を受くる爲に、光榮と尊貴とを冠らせられたるを見る、彼が神の恩寵に由りて、衆人の爲に死を嘗めん爲なり。蓋萬物の本づく所、萬物の歸する所の者が、多くの子を光榮に導きて、彼等の救の君をして、苦を以て成全せしむるは、宜しきに合へり。

アリルイヤ、第五調。

主の悉くの天使よ、彼を讃め揚げよ、其悉くの軍よ、彼を讃め揚げよ。

句、蓋彼言ひたれば、即成り、命じたれば、即造られたり。

福音經、マトフェイ五十二端。

主は左の譬を設けて曰へり、天國は人の其田に美種を播きたるが如し。人人の寢ぬる時、其敵來り、麥の中に稗を播きて去れり。苗秀でて實るに及び、稗も亦見れたり。家主の諸僕來りて之に謂へり、主よ、爾美種を爾の田に播きたるに非ずや、然らば何に由りて稗あるか、彼は之に謂へり、敵人之を爲せり。諸僕彼に謂へり、然らば爾は我等が往きて、之を抜かんことを欲するか、彼曰へり、否、恐らくは爾等稗を抜く時、之と共に麥をも抜かん。二の者共に長ずるを容して、収穫に至れ、収穫の時我刈る者に謂はん、先ず稗を集め、之を束ねて、焚かん爲に備へ、而して麥を倉に斂めよと。其門徒彼に就きて曰く、請ふ、田の稗の譬を我等に解け。彼は之に答へて曰へり、美種を播く者は人の子なり、田は世界なり、美種は天國の子、稗は凶悪者の子なり、之を播きたる敵は悪魔なり、収穫は世の終末なり、刈る者は天使等なり。故に稗

を集めて、火に焚くが如く、此の世の終末にも是くの如くならん。人の子は其天使等を遣して其國より凡の誘惑と不法を行ふ者とを集めて、之を火の爐に投ぜん、彼處に哀哭と切齒とあらん。時に義人等は其父の國に於て日の如く輝かん。耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

領聖詞、爾は風を以て爾の使者と爲し、焔を以て爾の役者と爲す。

火曜日に、前驅の提綱、第七調。

義人は主の爲に樂しみて、彼を恃まん。

句、神よ、我が祷の時我が聲を聽き給へ。

使徒行實三十三端。

彼の日イオアン其職を卒ふるに臨みて曰へり、爾等我を誰なりと意ふか、我は彼に非ず、然れども視よ、我に後れて來る者あり、我其足の履を解くにも堪へずと。兄弟よ、アウラアムの族の諸子、及び爾等の中に神を畏るる者よ、此の救の言は爾等に遣されたり。蓋イエルサリムに居る者、及び其有司等は、彼を識らずして、彼を罪に定めて、安息日毎に讀む所の預言者の言を應はせ、一も死に當る故を獲ずして、ピラトに彼を殺さんことを求めたり。一切彼を指して録されし事を卒へて後、彼を木より下して、墓に置けり。然れども神は彼を死より復活せしめたり。彼は多日の間、彼と偕にガリレヤよりイエルサリムに上りし者に現れたり、彼等は今民の前に彼を證する者なり。我等も爾等に福音して云ふ、我が先祖に賜はりし許約は、神之をイイススを復活せしめしを以て、其子孫なる我等に應はしめたり。

アリルイヤ、第四調。

義人は繁ること椶櫚の如く、高くなることリワンの柏香木の如し。

句、彼等は主の宮に植えられて、我が神の庭に榮ゆ。

福音經、イオアン三端。

彼の時イオアンはイイススの己に來るを見て曰く、視よ、神の羔、世の罪を任ふ者なり。我が嘗て、我の後に來る者ありて、我の前と爲れり、蓋其本我より先なる者なりと云ひしは、即斯の人なり。我は彼を識らざりき、然れども來りて、水を以て洗を授くるは、殊に彼がイズライリに顯されん爲なり。イオアン又證して曰へり、我は聖神、鴿の如く天より降りて、彼に止るを見たり。我は彼を識らざりき、然れども水を以て洗を授けん爲に我を遣しし者は我に謂へり、爾が聖神の降りて、之に止るを見る者、此れ即聖神を以て洗を授くる者なりと。我之を見、而して其神の子たるを證せり。

領聖詞、義人は永く記憶せられ、悪評を懼れざらん。

水曜日に、至聖なる生神女の堤綱。第三調。生神女の歌。

我が靈は主を崇め、我が神は神我が救主を悦べり。

句、蓋其婢の卑しきを顧みたり、今より後萬世を福なりと謂はん。

使徒フィリッピ書二四十端。

兄弟よ、爾等はハリストス イイススの意を以て意とすべし。彼は神の像にして、神と匹しくなることを僭ふとせざりき、然れども己を虚しくして、僕の貌を受け、人と同じき者と爲りて、外形に於て人の如くなり、己を卑くして、死に至るまで順ひ、且十字架の死に至れり。故に神も彼を無上に高くして、彼に凡の名に超ゆる名を賜へり、凡そ天に在り、地に在り、及び地の下に在る者の膝は、イイススの名の前に屈み、且凡の舌は、イイスス ハリストスが主たるを承け認めて、光榮を神父に歸せん爲なり。

アリルイヤ、第八調。
女よ、之を聽き、之を觀、爾の耳を傾けよ。
句、民中の富める者は爾の顔を拜まん。

福音經ルカ五十四端。
彼の時イイスス一の村に入りしに、或婦マルファと名づくる者、彼を其家に迎へたり。其姉妹にマリヤと名づくる者あり、イイススの足下に坐して、其言を聽けり。マルファは供事の多きに因りて、心を煩はし、就きて曰へり、主よ、我が姉妹我一人を遺して供事せしむるを爾意と爲さざるか、之に命じて、我を助けしめよ。イイスス彼に答へて曰へり、マルファよ、マルファよ、爾は多くの事を慮りて心を勞せり、然れども需むる所は一のみ。マリヤは善き分を擇びたり、是は彼より奪ふ可からず。此を言ふ時、一の婦民の中より聲を揚げて、彼に謂へり、爾を孕みし腹と爾が哺ひし乳とは福なり。彼は曰へり、然り、神の言を聽きて之を守る者は福なり。
領聖詞、我救の爵を受けて、主の名を籲ばん。

木曜日に、諸使徒の提綱。
其聲は全地に傳はり、其言は地の極に至る。
句、諸天は神の光榮を傳へ、穹蒼は其手の作爲を誥ぐ。

使徒、コリンフ書百三十一端。
兄弟よ、神は我等使徒を末なる者と爲して、死に定められたる者の如く顯せり、我等

は世界の爲、天使等及び人人の爲に、觀玩と爲りたればなり。我等はハリストスに因りて愚なり、爾等はハリストスに於て智なり、我等は弱く、爾等は強し、爾等は榮を享け、我等は辱に處るなり。今に迄るまで我等は飢え、渴き、裸裎になり、撻たれ、定り居る處なく、勞して手づから工を作す。我等詈られては祝福し、窘逐せられては忍び、謗られては祷る、我等は世の汚穢の如く、衆の踐む所の塵垢の如くせられて今に至れり。我は爾等を愧しめんと欲して此を書するに非ず、乃我が愛する所の子の如く爾等を訓ふるなり。蓋爾等には、ハリストスに於て萬人の師傅ありと雖、多くの父あるなし、我ハリストス イイススに於て福音を以て爾等を生みたればなり。故に我爾等に求む、我に效ひて、我のハリストスに於けるが如くせよ。

アリルイヤ、第一調。
主よ、諸天は爾の奇異なる事と爾の眞實とを聖者の會に讃榮せん。
句、神は聖者の大會に於て畏るべし。

福音經マトフェイ三十四端の半より。
彼の時イイスス其十二門徒を召して、彼等に汚鬼を制する權を與へたり、之を逐ひ出し、又諸の病諸の疾を醫さん爲なり。イイスス此の十二徒を遣し、之に戒めて曰へり、異邦の途に往く勿れ、サマリヤの邑な入る勿れ、寧イズライリの家の亡びし羊

に往け。往く時宣べて曰へ、天國は邇づけりと。病者を醫し、癩者を潔め、死者を起し、魔鬼を逐ひ出せ、費なくして受けたり費なくして與へよ。
領聖詞、其聲は全地に傳はり、其言は地の極に至る。

金曜日に十字架の提綱、第七調。

主我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是聖なり。
句、主は王たり、諸民戰くべし。

使徒、コリンフ書百二十五端。

兄弟よ、十字架の言は滅ぶる者の爲には愚なり、我等救はるゝ者の爲には神の能なり。蓋録して云へるあり、我智者の智を滅し、識者の識を廃せん。智者は安にか在る、學士は安にか在る、此の世の辯論者は安にか在る、神は此の世の智慧を愚と爲らしめしに非ずやと。蓋世は其智慧を以て、神を神の智慧に於て識らざりしに由りて、神は傳道の愚を以て、信ずる者を救はんことを喜べり。蓋イウデヤ人は休徴を乞ひ、エルリン人は智慧を覓む、然れども我等は十字架に釘せられしハリストスを傳ふ、此れイウデヤ人の爲には礙、エルリン人の爲には愚、惟召されたる者の爲には、イ

平日の堤綱、使徒、アリルイヤ、福音經　五一

平日の堤綱、使徒、アリルイヤ、福音經　五二

ウデヤ人及びエルリン人を論ぜず、ハリストスは神の能及び神の智慧なり。

アリルイヤ、第一調。

爾が古より獲たる會を記憶せよ。
句、神我が古世よりの王は救を地の中に作せり。

福音經、イオアン九端。

主曰へり、天より降りし人の子、仍天に在る者の外に、天に升りし者なし。モイセイが野に在りて蛇を擧げし如く、人の子も是くの如く擧げらるべし、凡そ彼を信ずる者の亾ぶるなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。蓋神は世を愛して、其獨生の子を賜ふに至れり、凡そ彼を信ずる者の亾ぶるなく、乃永遠の生命を得ん爲なり。蓋神が其子を世に遣しては、世を定罪せん爲に非ず、乃世の彼に由りて救はれん爲なり。
領聖詞、神よ、爾は救を地の中に作せり

「スボタ」に、衆聖人の提綱、第八調。

義人よ、主の爲に喜び樂しめ。
句、不法を赦され、罪を蔽はれたる人は福なり。
又死者に、第六調、彼等の靈は福に居らん。

使徒、フェサロニカ書二百七十端。

兄弟よ、寢りし者に至りては、我爾等が知らざるを欲せず、爾等が望なき他の者の如く哀しまざらん爲なり。蓋若し我等イイススの死して復活せしことを信ぜば、則神はイイススに在りて寢りし者をも彼と偕に攜へん。蓋我等主の言を以て爾等に語ぐ、我等、生きて主の來る迄存する者は、寢りし者に先だたざらん、蓋主親ら號令と、

天使首の聲と、神の筮に伴はれて、天より降らん、而してハリストスに在りて死せし者は先づ復活せん、其後我等、生きて存する者は、彼等と偕に雲に擧げられて、主を空中に迎へん、是くの如くして常に主と偕に居らん。

アリルイヤ、第四調。

義人は呼ぶに、主は之を聽き、彼等を悉くの憂より免れしむ。
句、義人には憂多し、然れども主は之を悉く免れしめん。
句、主よ、爾が選び近づけし者は福なり、彼等の記憶は世世に在らん。

福音經、イオアン十六端。

主は彼に來れるイウデヤ人に謂へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、我が言を聽きて、我

を遣しし者を信ずる人は、永遠の生命を有ち、且審判の爲に來らず、乃死より生命に移れり。我誠に誠に爾等に語ぐ、時は來る、今は是れなり、死せし者は神の子の聲を聞かん、之を聞きて生きん。蓋父が己の中に生命を有つが如く、此くの如く子にも己の中に生命を有たしめ、且彼に審判を行ふ權を與へたり、其人の子たるに因りてなり。之を奇む勿れ、蓋時は來る、凡そ墓の中に在る者は神の子の聲を聞かん、而して善を行ひし者は生命の復活に出で、悪を爲しし者は定罪の復活に出でん。我何事をも己に由りて行ふ能はず。聞く所に遵ひて審判す、而して我が審判は義なり、蓋我己の旨を求めず、乃我を遣しし父の旨を求むるなり。
領聖詞、義人よ、主の爲に喜べ、讃榮するは義者に適ふ。
又、主よ、爾が選び近づけし者は、福なり、彼等の記憶は世世に在らん。

主日外の週間の奉事の指定

主日の晩課には、八調經に指定せし如く、「主よ、爾に籲ぶ」に八調經の讃頌三。次に聖人の三。光榮、若し之あらば、聖人の。今も、生神女讃詞。若しなくば、光榮、今も、生神女讃詞。次に本日の提綱及び其他。挿句には八調經の讃頌。光榮、若し之あらば、聖人の。今も、生神女讃詞。若しなくば、光榮、今も、生神女讃詞。若し奉事例に据りて聖人の讃頌六章あらば、其時八調經の晩課の讃頌を措きて、聖人の讃頌六章を歌ふ。光榮、若し之あらば、聖人の。今も、生神女讃詞。若しなくば、光榮、今も、生神女讃詞。若し二聖人に讃頌あらば、各三章を誦す。光榮も若し之あらば、同じく誦す。挿句には八調經の讃頌。光榮、若し之あらば、聖人の。今も、生神女讃詞。若しなくば、光榮、今も、生神女讃詞。「主宰よ、今爾の言に循ひて云云」及び聖三祝文の後に聖人の讃詞を誦す。光榮、今も、本日の生神女讃詞、讃詞の調に据る。若し二聖人にして之に二讃詞あらば、一の聖人の讃詞を誦す、光榮、他の聖人の讃詞。今も、小なる生神女讃詞の一。他の讃詞の調に据る。若し祭前期或は祭後期ならば、「主よ、爾に籲ぶ」に祭日の讃頌三、及び聖人の三。光榮、若し之あらば聖人の。今も、祭日の。若しなくば、其時光榮、今も、祭日のを誦す。挿句には祭日の。光榮、若し之あらば、聖人の。今も、祭日の。若しなくば、其時光榮、今も、祭日のを誦す。「主宰よ、今爾の言に循ひて云云」及び聖三祝文の後に、若し之あらば、聖

人の讃詞を誦す。光榮、今も、祭日の。若しなくば、其時祭日の讃詞のみを誦す。其他常例の如し、並に發放詞。若し祭前期或は祭後期、又は多燭詞或は徹夜祷のある聖人ならば、之に晩課、早課、及び聖體禮儀を歌ふこと、奉事例の次第に示す所の如し。晩堂課を歌ふこと常例の如し。「常に福にして」及び聖三祝文の後に本堂の讃詞を誦す。若し聖人の堂ならば、先に本日の讃詞、後に聖人の堂のを誦す。次に共通の讃詞、「吾が諸神父の神云云」。其後「ハリストス神よ、全世界にある云云」。光榮、「ハリストスよ、爾が諸僕の靈を云云」。今も、生神女讃詞、「主よ、諸聖人と生神女の祈祷に依り云云」。若しハリストスの堂ならば、火曜日と木曜日との晩堂課に於て年中、堂の讃詞を誦せず、蓋本日の讃詞、「主よ、爾の民を救ひ云云」を稱す。次に生神女の、或は聖人の堂の。其後共過の、前に示ししが如し。他の日にも斯くの如く稱す、但し「スボタ」と主日と祭前期と祭後期との外。若し多燭詞ある聖人に遇はば、其時聖三祝文の後に聖人の小讃詞を誦して、示しし所の本日及び堂の讃詞を誦せず。若し祭前期或は祭後期ならば、其時聖三祝文の後に祭日の小讃詞のみを誦す。若し多燭詞或は徹夜祷の聖人ならば、聖三祝文の後に聖人の小讃詞を誦す。光榮、今も、祭日の小讃詞。其他發放詞に至るまで常例の如し。

夜半課を歌ふこと常の如し、奉事例に記す所に据る。唯若し主宰の祭日、或は主宰の祭日に准ぜられたる生神女の祭日ならば、其時夜半課に第一の聖三祝文の後に、「視

よ、新郎は夜半に來る云云」に代へて、祭日の讃詞(トロパリ)のみを誦す。第二の聖三祝文の後に祭日の小讃詞(コンダク)のみを誦す。次に「主憐めよ」、十二次、並に發放詞。「主よ、復活と永生との望を懐きて云云」の祝文は此等の祭日に誦せず。ラザリの「スボタ」、五旬中節、五旬祭の翌日、ハリストス降誕祭の翌日、即生神女の會衆祭、及び神現祭の翌日、即授洗イオアンの會衆祭の夜半課も誦すること上述の如し。「パスハ」祭期の末日には、夜半課に誦する所左の如し、第一の聖三祝文の後に、「視よ、新郎は夜半に來る云云」に代へて、主日の讃詞(トロパリ)、「信者よ、父と聖神と共に始めなき言云云」。光榮、今も、其生神女讃詞。第二の聖三祝文の後に、「主よ、至善なるに依りて爾の諸僕云云」に代へて、「パスハ」の小讃詞(コンダク)、「死せざるハリストス神よ、爾は墓に降れども云云」のみ。次に「主憐めよ」、十二次、並に發放詞。「主よ、復活と永生との望を懐きて云云」の祝文を誦せず。若し聖人の堂の祭に遇はば、夜半課に第一の聖三祝文の後に、「視よ、新郎は夜半に來る云云」に代へて、聖人の堂の讃詞(トロパリ)を誦す。光榮、

今も、主日の生神女讃詞、聖人の讃詞(トロパリ)の調に据る。第二の聖三祝文の後に、「主よ、至善なるに依りて爾の諸僕」に代へて、聖人の堂の小讃詞(コンダク)のみを誦す。其後「主憐めよ」、十二次、並に發放詞。「主よ、復活と永生との望を懐きて云云」の祝文を誦せず。若し前驅イオアンの誕生祭(七月七日)、或は斬首(九月十一日)、或は首座の使徒ペトル及びパワェルの祭(七月十二日)ならば、夜半課に誦する所左の如し、第一の聖三祝文の後に、「視よ、新郎は夜半に來る云云」に代へて、聖人の讃詞(トロパリ)。光榮、今も、主日の生神女讃詞、聖人の讃詞(トロパリ)の調に据る。第二の聖三祝文の後に、「主よ、至善なるに依りて爾の諸僕云云」に代へて、聖人の小讃詞(コンダク)のみ。其後主憐めよ、十二次、並に發放詞。「主よ、復活と永生との望を懐きて云云」の祝文を誦せず。

早課を月曜日に始むること又歌ふこと常例の如し。唯「主は神なり」に聖人の讃詞(トロパリ)二次。光榮、今も、生神女讃詞、聖人の讃詞(トロパリ)の調に据る、但し小なる生神女讃詞の一。若し聖人の順序の讃詞(トロパリ)なくば、其聖人の成聖者或は克肖者等たるに適ひて共過の讃詞(トロパリ)を誦すること二次。光榮、今も、生神女讃詞、讃詞(トロパリ)の調に据る。若し祭前期或は祭後期ならば、其時祭日の讃詞(トロパリ)二次。光榮、若し之あらば、聖人の。今も、祭日の。若し聖人の讃詞(トロパリ)なくば、祭日の讃詞(トロパリ)を誦すること二次。光榮、今も、同じく祭日の讃詞(トロパリ)。月曜日の早課に痛悔の規程(カノン)、「イルモス」と共に六章、無形者の四章、及び月課(ミネヤ)經の聖人の四章を歌ふ。若し六章の聖人ならば、八調經の致命者の二の讃詞(トロパリ)を措きて、聖人の六章を歌ふ。若し多燭詞(ポリエレイ)の聖人ならば、其時八調經を歌はず、即生神女の規程(カノン)、或は若し之あらば、祭前期の、或は祭後期の、「イルモス」と共に六章、、即「イルモス」二次、讃詞(トロパリ)四章、及び聖人の八章。斯く多燭詞(ポリエレイ)の聖人の規程(カノン)を八章に歌ふことは七日の其他の日にも月曜日に記ししが如し。若し二聖人あるに遇はば、無形者の規程(カノン)を措きて、痛悔の規程(カノン)、「イルモス」と共に六章、及び聖人の各四章を歌ふ。火

曜日の早課に痛悔の規程(カノン)、「イルモス」と共に六章、前驅の四章、及び月課(ミネヤ)經の聖人の四章、若し六章の聖人ならば八調經の致命者の二讃詞(トロパリ)を措きて、聖人の六章を歌ふ。多燭詞(ポリエレイ)の聖人の事に付きては上に記ししが如し。同じく二聖人に遇はば、其規程(カノン)各四章。水曜日の早課には十字架の規程(カノン)、「イルモス」と共に六章、生神女の四章、及び聖人の四章。若し六章の聖人ならば、八調經の致命者の二讃詞(トロパリ)を措きて、十字架の規程(カノン)、「イルモス」と共に四章、生神女の四章、及び聖人の六章を歌ふ。若し二聖人ならば、八調經の生神女の規程(カノン)を措きて、二聖人の八章を歌ふ。木曜日の早課には、聖使徒等の規程(カノン)、「イルモス」と共に六章、聖ニコライの四章、及び月課(ミネヤ)經の聖人の

四章を歌ふ。若し六章の聖人ならば、使徒等の規程(カノン)、「イルモス」及び生神女讃詞と共に五章、聖ニコライの、生神女讃詞と共に三章、及び月課(ミネヤ)經の六章を歌ふ。若し二聖人ならば、使徒等の規程(カノン)、「イルモス」と共に六章及び二聖人の八章を歌ふ。金曜日には歌ふこと水曜日に示ししが如くにして變ることなし。第三歌頌の後に聖人の坐誦讃(セダレン)詞。光榮、今も、生神女讃詞。若し二聖人にして此れに二小讃(コンダク)詞及び二坐誦讃(セダレン)詞あらば、其時先に一の聖人の小讃(コンダク)詞、又之あらば同讃(イコス)詞、次に此の聖人の坐誦讃(セダレン)詞。光榮、他の聖人の坐誦讃(セダレン)詞。今も、生神女讃詞を誦す。他の聖人の小讃(コンダク)詞及び同讃(イコス)詞は第六歌頌の後に誦す。若し祭前期、或は祭後期ならば、生神女讃詞に代へて、今も、祭日のを誦す。若し六章の聖人ならば、其坐誦讃(セダレン)詞を誦すること二次。光榮、今も、祭日の。第六歌頌の後に、若し之あらば、聖人の小讃(コンダク)詞及び同讃(イコス)詞。若しなくば、其聖人の成聖者或は克肖者等たるに適ひて共過の小讃(コンダク)詞を誦す。若し祭前期ならば、祭日の小讃(コンダク)詞及び同讃(イコス)詞を誦す。若し多燭(ポリエレイ)詞或は徹夜祷の聖人ならば、小讃(コンダク)詞及び同讃(イコス)詞は聖人の。其時祭前期或は祭後期の小讃(コンダク)詞及び同讃(イコス)詞を誦すること左の如し、第三歌頌の後に祭日の小讃(コンダク)詞及び同讃(イコス)詞、次に聖人の坐誦讃(セダレン)詞二次。光榮、今も、祭日の坐誦讃(セダレン)詞。其他の次第は奉事例(ティピコン)に載する所の如し。

八調經の光耀歌。光榮、今も、其生神女讃詞。若し月課(ミネヤ)經に聖人の光耀歌あらば、之を本日の光耀歌の後に、光榮に誦すべし。今も、其生神女讃詞。若し月課(ミネヤ)經に二聖人及び二光耀歌あらば、其時八調經のを第一に誦すべし、次に聖人の。光榮、他の聖人の。今も、其生神女讃詞。若し水曜日或は金曜日ならば、今も、八調經の十字架生神女讃詞。「スボタ」に於て若し順序の聖人に光耀歌あらば、第九歌頌の後に先に月課(ミネヤ)經の聖人の光耀歌を誦す。次に光榮、八調經の光耀歌。今も、其生神女讃詞。斯くの如く光耀歌の誦せらるるは八調經が月課(ミネヤ)經と併せ歌はるる時なり。

「凡そ呼吸ある者」には、若し之あらば、聖人の讃頌(スティヒラ)、奉事例(ティピコン)に示す所の數に循ふ。光榮、聖人の。今も、生神女讃詞、聖人の調に据る。次に誦す、「光榮は爾我等に光を顯しし主に歸す」。若し「凡そ呼吸ある者」に聖人の讃頌(スティヒラ)なくば、其時誦す、「主我等の神よ、光榮は爾に歸す云云」。挿句(くづけ)には、八調經の讃頌(スティヒラ)。光榮、若し之あらば、

聖人の。今も、生神女讃詞、聖人の調に据る。若しなくば、其時光榮、今も、八調經の。若し早課に聖人の讃頌(スティヒラ)附唱と共にあらば、其時挿句(くづけ)に八調經の讃頌(スティヒラ)を句と共に誦す。第一句、「主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ云云」。第二句、「願くは主吾が神の惠は云云」。次に聖人の遇ふ所の附唱、及び其讃頌(スティヒラ)。光榮も聖人の。今も、

生神女讃詞。晩課の挿句(くづけ)にも同じく誦す。若し祭前期或は祭後期にして八調經を歌はざる時ならば、其時挿句(くづけ)に祭日の讃頌(スティヒラ)を句と共に誦す。若し聖人の讃頌(スティヒラ)附唱と共にあらば、其時祭日の讃頌(スティヒラ)の後祭日の光榮の前に聖人の讃頌(スティヒラ)を附唱と共に誦す。光榮、聖人の。今も、祭日の。晩課の挿句(くづけ)にも誦すること此くの如し。「至上者よ、主を讃榮し云云」及び聖三祝文の後に聖人の讃詞(トロパリ)を誦す。光榮、今も、生神女讃詞、聖人の讃詞(トロパリ)の調に据る。若し祭前期或は祭後期ならば、其時聖人の讃詞(トロパリ)を誦す。光榮、今も、祭日の。若し聖人の讃詞(トロパリ)なくば、其時祭日の讃詞(トロパリ)のみを誦す。若し祭前期或は祭後期にあらずば、其聖人の成聖者或は克肖者等たるに適ひて共通の讃詞(トロパリ)を誦す。光榮、今も、生神女讃詞、讃詞(トロパリ)の調に据る。

第一時課には、光榮、聖人の讃詞(トロパリ)。今も、時課の生神女讃詞。聖三祝文の後に聖人の小讃詞(コンダク)。若し二聖人及び二讃詞(トロパリ)あらば、其時聖人の讃詞(トロパリ)。光榮、他の聖人の讃詞(トロパリ)。今も、時課の生神女讃詞。聖三祝文の後に第一の聖人の小讃詞(コンダク)。第三時課及び其他の時課にも同じく誦す。小讃詞(コンダク)を更(かわるがわる)用いる。祭前期及び祭後期に遇はば、前に祭日の讃詞(トロパリ)を誦す。次に光榮、聖人の讃詞(トロパリ)。今も、時課の生神女讃詞。聖三祝文の後に凡ての時課に變ることなく祭日の小讃詞(コンダク)を誦す。六章の聖人ありとも毎日斯くの如く行ふべし、若し聖人の或は二聖人の讃詞(トロパリ)も小讃詞(コンダク)もなく、若し祭前期或は祭後期にあらずば、其時時課には、其聖人の成聖者或は克肖者等たるに適ひて、共過の讃詞(トロパリ)及び小讃詞(コンダク)を誦す。「神よ、我が自由と自由ならざると云云」及び聖三祝文の後に、先にハリストスの堂の小讃詞(コンダク)を誦し、次に本日及び聖人の堂の、并に若し之あらば、順序の聖人の小讃詞(コンダク)を誦す。光榮、「ハリストスよ、爾が諸僕の靈を諸聖人と共に云云」。今も、生神女の堂の小讃詞(コンダク)。若し生神女の堂にあらずば、其時今も、「ハリスティアニン等の辱を得ざる轉達云云」。若しハリストスの祭前期或は祭後期ならば、其時先づハリストスの祭日の小讃詞(コンダク)を誦し、其他順序に循ふ。ハリストスの堂の小讃詞(コンダク)を誦せず。斯くの如く誦するは聖體禮儀(リトゥルギヤ)を行はざる時なり。

聖體禮儀(リトゥルギヤ)には八調經の眞福詞六章。若し奉事例(ティピコン)に据りて聖人の歌頌を誦すべくば、其時八調經の四章、及び聖人の歌頌の四章を誦す。若二聖人ありて、奉事例(ティピコン)各其歌頌を示さば、其時八調經を措く。若し祭前期或は祭後期ならば、其時奉事例(ティピコン)の示す如く誦す。聖人の後に先づハリストスの堂の、或は生神女の堂の讃詞(トロパリ)、次に本日の讃詞(トロパリ)を誦す。若し聖人の堂ならば、聖人の堂の讃詞(トロパリ)、及び若し之あらば、順序の聖人の讃詞(トロパリ)を誦す。次にハリストスの堂の、及び本日の小讃詞(コンダク)、或は聖人の堂の、及び若し之あら

ば、順序の聖人の小讃詞を誦す。次に光榮、「ハリストスよ、爾が諸僕の靈を云云」。

今も、生神女の堂の小讃詞。若し生神女の堂にあらずば、今も、「ハリスティアニン等の辱を得ざる轉達云云」を誦す。若しハリストスの祭前期或は祭後期ならば、先づハリストスの祭日の、及び生神女の堂の讃詞を誦し、其他順序に循ふ。ハリストスの堂の讃詞及び小讃詞は其時に誦せず。同じく生神女の祭前期及び祭後期にも其堂の讃詞及び小讃詞を誦せず。若し水曜日或は金曜日ならば、先づ本日の讃詞、「主よ、爾の民を救ひ云云」を誦し、次に生神女の堂の讃詞を誦す。若し聖人の堂ならば、其堂の、及び順序の聖人の讃詞を誦す。次に本日の小讃詞、「甘じて十字架に擧げられしハリストス神よ云云」。及び聖人の堂の、并に順序の聖人の小讃詞を誦す。光榮、「ハリストスよ、爾の諸僕の靈を云云」。今も、生神女の堂の。生神女の堂にあらずしてハリストスの堂ならば、讃詞の後に順序の聖人の小讃詞を誦す。光榮、「ハリストスよ、爾が諸僕の靈を云云」。今も、ハリストスの堂の。ハリストス及び生神女の堂ならずば、今も、「ハリスティアニン等の辱を得ざる轉達云云」を誦す。祭前期及び祭後期には本日の讃詞及び小讃詞は聖體禮儀に聖入の後に祭期の末日に至るまで誦せず、八調經を用いざるによる。提綱、使徒、アリルイヤ、福音經及び領聖詞は本日の、又奉事例に示す所の如し。「スボタ」及び主日の外他の日にも斯くの如く歌ふ。

～～～～～～～～～～～

「スボタ」の奉事の指定

「主は神なり」を歌ふ時、晩課には第十八「カフィズマ」を誦す。「主よ、爾に籲ぶ」に月課經の聖人の讃頌六章。光榮、若し之あらば、聖人の、若しなくば、光榮、今も、第一の生神女讃詞、本調に据る。挿句には八調經の致命者の讃頌三章、「主よ、爾に籲ぶ」に記したる者なり、其中の第一を措く。附唱は、第一は「天に居る者よ、我目を擧げて爾を望む云云」、第二は「主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ云云」。光榮、若し之あらば、聖人の、若しなくば、光榮、今も、八調經の生神女讃詞。「天に在す」の後に聖人の讃詞。光榮、今も、本調の主日の生神女讃詞。聯祷及び發放詞。晩堂課には、金曜日に「常に福にして」及び聖三祝文の後に、ハリストスの堂の、或は生神女の堂の讃詞を誦す。聖人の堂の讃詞は金曜日に誦せず。次に「使徒、致命者、及び預言者云云」。光榮、「ハリストスよ、爾が諸僕の靈を云云」。今も、「主よ、全世界は捧神なる致命者を云云」。若し祭前期或は祭後期ならば、祭日の小讃詞を誦す。

若し讃揚詞ある聖人ならば、聖人の小讃詞を誦す。光榮、今も、祭日の。

夜半課を歌ふこと常例の如し。唯若し主宰或は生神女の祭ならば、祭期の末日と共に歌ふ。前驅の誕生、斬首、ペトル及びパワェル、聖人の堂、生神女の會衆祭、及び前驅イオアンの會衆祭も此と同じ。第一の聖三祝文の後に讃詞(トロパリ)を誦し、第二の聖三祝文の後に小讃詞(コンダク)を誦す、月曜日に示ししが如し。

早課には、「主は神なり」に聖人の讃詞(トロパリ)二次。光榮、今も、主日の生神女讃詞、聖人の讃詞(トロパリ)の調に据る、本日の調に据るにあらず、蓋本調の主日の生神女讃詞は第一の坐誦讃詞(セダレン)の後に誦せらる。今も、若し多燭詞(ポリエレイ)の聖人ならば、其時「主は神なり」に聖人の讃詞(トロパリ)の後に本調の主日の生神女讃詞。若し「スボタ」に祭前期或は祭後期あらば、「主は神なり」に祭日の讃詞(トロパリ)を誦すること二次。光榮、聖人の讃詞(トロパリ)。今も、祭日の。若し聖人の讃詞(トロパリ)なくば、其時祭日の讃詞(トロパリ)を誦すること二次。光榮、今も、同上。次に第十六「カフィズマ」を誦す。「カフィズマ」の後に聯祷、及び八調經の第一第二の致命者の坐誦讃詞(セダレン)。光榮、今も、主日の第一の生神女讃詞。並に誦讀。次に「ネポロチニ」。「ネポロチニ」の後に聯祷。及び八調經の第三第四の致命者の坐誦讃詞(セダレン)、並に死者讃詞。光榮、今も、生神女讃詞。誦讀。第五十聖詠。次に規程(カノン)を歌ふ。「スボタ」には常に月課(ミネヤ)經の聖人の規程(カノン)を先にす。月課(ミネヤ)經の聖人の規程(カノン)、「イルモス」と共に六章、次に聖人の堂の四章、及び八調經の致命者の規程(カノン)四章。若し月課(ミネヤ)經に二聖人あらば、其一に規程(カノン)、「イルモス」と共に六章、其二に四章を歌ふ、並に八調經の致命者の規程(カノン)四章。堂の規程(カノン)を措く。若しハリストス或は生神女の堂ならば、先に堂の規程(カノン)を「イルモス」と共に六章に歌ふ、即「イルモス」二次、讃詞(トロパリ)四章。並に聖人の四章、八調經の致命者の規程(カノン)四章。若し六章の聖人ならば、其時堂の規程(カノン)、「イルモス」と共に四章、及び聖人の六章、並に八調經の四章を歌ふ。

何の「スボタ」に論なく讃揚詞ある聖人に遇はば、早課に、若し之あらば、ハリストス或は生神女の堂の規程(カノン)、「イルモス」と共に六章、即「イルモス」二次、讃詞(トロパリ)四章を歌ひ、並に聖人の八章を歌ふ。第九歌頌の後に聖人の光耀歌二次。光榮、今も、生神女讃詞。第三歌頌の後に本日の聖人の坐誦讃詞(セダレン)。光榮、今も、其生神女讃詞。第六歌頌の後に聖人の小讃詞(コンダク)及び同讃詞(イコス)。「アリルイヤ」を「スボタ」に歌はざる處には全奉事を順序の聖人に歌ふ、示ししが如し。若し聖人の讃詞(トロパリ)及び小讃詞(コンダク)なくば、其聖人の成聖者或は克肖者等たるに適ひて、共通の讃詞(トロパリ)及び小讃詞(コンダク)を誦す。第九歌頌の後には、先に聖人の光耀歌。次に光榮、八調經の。今も、其生神女讃詞。若し聖人の光耀歌なくば、八調經の光耀歌、「神として死者と生者とを司り云云」。光榮、今も、「生

神女よ、我等は爾を以て誇り云云」。若し「スボタ」に讃揚詞の聖人あらば、聖人の光耀歌二次。光榮、今も、其生神女讃詞。若し「凡そ呼吸ある者」に聖人の讃頌(スティヒラ)なくば、其時誦す、「主我等の神よ、光榮は爾に歸す云云」、及び「光榮は爾我等に光を顯しし主に歸す」。其時八調經の「凡そ呼吸ある者」に讃頌(スティヒラ)を歌はずして、挿句(くづけ)に之

を歌ふ。若し「凡そ呼吸ある者」に聖人の讃頌(スティヒラ)を歌はば、其時「主我等の神よ、光榮は爾に歸す云云」の句を誦せずして、讃頌(スティヒラ)の後直に誦す「光榮は爾我等に光を顯しし主に歸す」。其後、「我等主の前に吾が朝の祷を云云」、及び挿句(くづけ)の讃頌(スティヒラ)、即八調經に「凡そ呼吸ある者」に記す所の致命者讃詞三章なり。此に過常の附唱を誦す、其一「主よ、夙に爾の憐を以て云云」、其二「願はくは主吾が神の惠は云云」。第四章即死者讃詞を措く。光榮、若し之あらば、聖人の、若しなくば、光榮、今も、其生神女讃詞。八調經の挿句(くづけ)の讃頌(スティヒラ)は「スボタ」に「主我等の神よ云云」を歌ふ時には之を措く。「至上者よ、主を讃榮し云云」、及び聖三祝文の後に聖人の讃詞(トロパリ)。光榮、今も、早課の生神女讃詞、聖人の讃詞(トロパリ)の調に据る。若し祭前期或は祭後期ならば、聖人の讃詞(トロパリ)を誦す。光榮、今も、祭日の。若し祭前期或は祭後期に二聖人に遇ひ、之に二讃詞(トロパリ)あらば、其時聖人の讃詞(トロパリ)を誦し、光榮、他の聖人の讃詞(トロパリ)、今も、祭日のを誦す。若し聖人の讃詞(トロパリ)なくば、祭日の讃詞(トロパリ)のみを誦す。其後聯祷及び第一時課。

第一時課には、光榮、聖人の讃詞(トロパリ)。今も、時課の生神女讃詞。聖三祝文の後に聖人の小讃詞(コンダク)。若し祭前期或は祭後期ならば、祭日の讃詞(トロパリ)を誦す。光榮、聖人の。今も、時課の生神女讃詞。聖三祝文の後に祭日の小讃詞(コンダク)。若し二聖人に遇ひ、之に二讃詞(トロパリ)あらば、祭日の讃詞(トロパリ)を誦し、光榮、聖人の、今も、時課の生神女讃詞を誦す。聖三祝文の後に祭日の小讃詞(コンダク)。第三時課には祭日の讃詞(トロパリ)。光榮、他の聖人の讃詞(トロパリ)。祭日の小讃詞(コンダク)は必總ての時課に用いる、但し多燭詞(ポリエレイ)ある大聖人の外、蓋其時には小讃詞(コンダク)を更用(かわるがわる)いる。若し聖人の讃詞(トロパリ)なくば、其時祭日の讃詞(トロパリ)及び小讃詞(コンダク)を誦す。次に發放詞及び萬壽詞。

聖體禮儀(リトゥルギヤ)には八調經の眞福詞六章。若し聖人の歌頌あらば、其時先に聖人の第三歌頌「イルモス」と共に四章を誦し、次に八調經の四章を誦す。聖入の後に先にハリストスの堂の、及び生神女の讃詞(トロパリ)。本日の讃詞(トロパリ)、「聖使徒、致命者、預言者云云」。次に死者の爲に「主よ、至善なるに依りて爾の諸僕を記憶し云云」。若し順序の聖人の讃詞(トロパリ)あらば、「主よ、至善なるに依りて爾の諸僕を記憶し云云」を誦せず。次にハリストスの堂の、及び生神女の、并に順序の聖人の小讃詞(コンダク)。光榮、「ハリストスよ、爾が諸僕の靈云云」。今も、「主よ、全世界は捧神なる致命者を云云」。若し祭前期或は祭後

期ならば、聖人の後に祭日の、聖人の堂の、并に順序の聖人の讃詞(トロパリ)を誦す。次に聖人の堂の小讃詞(コンダク)。光榮、順序の聖人の。今も、祭日の。若しハリストスの堂ならば、其時ハリストスの祭前期及び祭後期に於てハリストスの堂の讃詞(トロパリ)及び小讃詞(コンダク)を誦せず。同じく生神女の祭前期及び祭後期にも其堂の讃詞(トロパリ)及び小讃詞(コンダク)を誦せず。提綱(ポロキメン)、使徒、アリルイヤ、福音經、及び領聖詞は先に聖人の、次に順序の。若し聖人に使徒の誦讀なくば、其時提綱(ポロキメン)、使徒、アリルイヤ、福音經、及び領聖詞は本日の、次に死者の爲の。税吏及びファリセイの主日より衆聖人の主日に至るまで、提綱(ポロキメン)、使徒、アリ

ルイヤ、福音經、及び領聖詞は先に「スボタ」の、次に聖人の。若し聖人に使徒、福音經、及び領聖詞なくば、其時死者の爲の。

ハリストスの復活の堂の事の指定。「スボタ」の早課に本調の規程(カノン)を如何に歌ふべき事。

復活の規程(カノン)を歌ふ、「イルモス」二次、讃詞(トロパリ)四章。歌ふこと左の如し、復活の讃詞(トロパリ)二章、十字架復活の一章、及び生神女の一章、月課經(ミネヤ)の聖人の四章、八調經の四章。若し六章の聖人の規程(カノン)ならば、其時復活の規程(カノン)、「イルモス」と共に四章、「イルモス」一次、月課經(ミネヤ)の聖人の六章、八調經の四章。他の指定左の如し、復活の規程(カノン)、「イルモス」と共に三章、生神女讃詞なく、「イルモス」一次、十字架復活の二章、生神女讃詞一章、月課經(ミネヤ)の四章、八調經の四章。

若し主宰或は生神女の祭の祭前期或は祭後期が「スボタ」及び七日の他の日（主日の外）に遇はば、八調經を歌はず、但し金曜日の晩課の「主よ、爾に籲ぶ」の定理歌(ドクマティク)の外。即祭前期或は祭後期の全奉事は常日の聖人の奉事に合せて歌はる、奉事例(ティピコン)に指定する所の如し。同じく生神女の衣をウラヘルナに納むる日（七月十五日）、及び生神女の尊帯を安置する日（九月十三日）にも八調經を歌はず。

至聖なる生神女に祷る例外の規程

敬虔なる帝フェオドル ドゥカラスカリの作。斯の規程は「イズライリは乾ける地」の祈祷禮儀の次第の如く歌はる。第八調。

第一歌頌

イルモス、昔奇跡を行ふモイセイの杖は、十字形に撃ちて、海を分ち、車に乗りて追ひ來るファラオンを沈め、徒歩にて逃るるイズライリ、神を讃め歌ふ者を救ひ給へり。

神の聘女よ、憂愁の浪は我が卑微なる靈を荒し、災禍の雲は我が心を蔽ふ。神聖にして永遠なる光を生みし者よ、我に欣ばしき光を輝かし給へ。

純潔なる者よ、我爾の堅固なる力を以て、無量の災禍と、憂愁と、殘忍なる諸敵と、度生の誘惑より救はれて、爾の至大なる仁慈を歌ひて、爾の我に於ける寛容を崇め讃む。

光榮

女宰よ、我今恃賴を抱きて爾の堅固なる保護に趨り附き、靈を全うして爾の帷幪の下に至り、膝を屈めて、泣きて祈る、「ハリスティアニン」等の避所よ、我不當の者を棄つる勿れ。

今も

童貞女よ、我朗に爾の威嚴を唱へて息めず、若し爾常に我が爲に轉達して、爾の子に祈らずは、誰か我を斯くの如き暴風と甚しき患難より救はん。

第三歌頌

イルモス、主天の穹蒼の至上なる造成者、教會の建立者、冀望の極、信者の固、獨人を愛する者よ、我を爾の愛に堅め給へ。

我甚しく惑へる者は切に爾に呼ぶ、女宰よ、速に轉達して、我爾の卑微なる不當の僕、熱切に爾の保護を求むる者に爾の援助を與へ給へ。

女宰生神女よ、爾は今我の上に爾の諸恩と爾の慈憐とを實に奇異なる者と爲し給へり。故に我爾を讃榮して、爾の無量なる仁慈を崇め歌ふ。

光榮

女宰よ、災禍の颶風は我を荒し、憂愁の激浪は我を沈む。速に我に援助の手と爾の熱切なる保護とを與へ給へ。

今も

女宰よ、我爾を實の生神女、死の權を破りし者と承け認む、蓋爾は活かす者として、地に入りたる我を地獄の桎梏より釋きて、生命に升せ給へり。

第四歌頌

イルモス、主よ、爾は我の固、我の力なり、爾は我の神、我の喜なり、爾は父の懐を離れずして、我等の貧しきに臨み給へり。故に預言者アウワクムと共に爾に呼ぶ、人

を慈む主よ、光榮は爾の力に歸す。

嗚呼我度生の憂愁と暴風とに蕩かさるる者は、何の處にか保護を求めん、何處に趨り附かん、何れに救を獲ん、孰をか熱切なる扶助者と恃まん。童貞女よ、我獨爾に恃賴を負はせ、爾に由りて勇み、爾を以て誇り、爾の帷幪に趨り附く。我を救ひ給へ。

至淨なる者よ、我爾の仁慈の甘愛の河、災禍と憂愁との爐に焚かるる我が卑微なる不當の靈を豊に潤す者を崇め讃めて、爾の帷幪に趨り附く。我を救ひ給へ。

光榮

至淨なる生神女よ、我獨爾を壞られぬ垣墻と、避所と、堅固なる帷幪及び救の武器として有つ。望を失ふ者の冀望、弱る者の扶助、憂ふる者の喜悦と保護なる童貞女よ、我放蕩の者を棄つる勿れ。　今も

嗚呼女宰よ、如何ぞ我宜しきに合ひて爾の無量なる慈憐を述べん。爾の仁慈は常に甚しく苦しめる吾が靈を水の如く覆ふ。爾の慮と諸恩とは大なる哉、唯我不當の者は無知にして之を失ふ。

第五歌頌

イルモス、隱れざる光よ、何ぞ我を爾の顔より退けし、外の闇は憐なる我を掩へり。祈る、我を返して、我が途を爾の誡の光に向はしめ給へ。

我感謝の心を抱きて爾に呼ぶ、母童貞女よ、慶べ、神の聘女よ、慶べ、神聖なる帷幪よ、慶べ、武器と壞れざる垣墻よ、慶べ、信を以て爾に趨り附く衆人の爲に轉達と、援助と、拯救なる者よ、慶べ。二次。

光榮

故なく我を悪む者は矢と、劍と、陥とを備へて、我が不當なる身を斃して、地に埋めんと欲す。潔き者よ、速に我を彼等より援けて救ひ給へ。　今も

我が樂しみし爾の諸恩と爾の無量なる慈憐との爲に我何の感謝の禮物をか爾に捧げん。我唯爾を讃榮し、歌頌して、爾の我に於ける言ひ難き仁慈を崇め讃む。

第六歌頌

イルモス、我祷を主の前に灌ぎ、我が憂を彼に告げん、我が靈は悪に滿ち、我が生命は地獄に近づきたればなり。我イオナの如く祈る、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

童貞女よ、憂愁の雲は我が不當なる靈と心とを覆ひて、幽暗を我が内に入る。近づき難き光を生みし者よ、爾の神聖なる祈祷の吹嘘を以て此等を我より遠く逐ひ給へ。

女宰よ、我爾を憂の中の慰藉、諸病の醫師、死の全き滅亾、生の盡くされぬ河、凡そ患難の中に在る者の速なる援助として知る。　光榮

女宰よ、我爾の仁慈の深處と、無量の奇跡の流、及び我に於ける爾の慈憐の實に絶えず注がるる泉を隱さずして、衆の前に之を承け認め、之を傳へ、之を崇め讃む。

今も

蜂の其巣を圍むが如く、度生の暴風は我を圍み、憂の矢は吾が心に傷つく。至淨なる者よ、願はくは我爾を此等を我より逐ひ、我を助け、我を護る者として得ん。

第七歌頌

イルモス、エウレイの少者は爐に在りて勇ましく焔を踐み、火を露に變じて籲べり、主神よ、爾は世世に崇め讃めらる。

光を生みし生神女よ、光の潔淨無玷なる器として、諸罪の夜に昧まされたる我を照

し給へ、我が愛を以て爾を讃榮せん爲なり。
童貞女、援助なき者の力、恃賴なき者の恃賴よ、我今凡の援助を失ひし者の爲に帷幪と、轉達と、保護、及び美譽と爲り給へ。　光榮
女宰よ、我爾の大なる恩賜を樂しめる者は靈と、思と、心とを全うして、口を以て爾を讃榮す。嗚呼爾の慈憐と爾の奇跡とは無量なる哉。　今も
童貞女よ、爾の慈憐なる眼を以て我が苦痛を顧みて、爾の無量なる仁慈に因りて我を甚しき憂愁と、災禍と、敵の害、及び諸の誘惑より救ひ給へ。

第八歌頌

イルモス、聖なる山に光榮を顯し、棘の中に火を以てモイセイに永貞童女の奥密を示しし主を歌ひて、萬世に崇め讃め揚げよ。
潔き童貞女よ、爾の大なる仁慈に由りて、我度生の激浪に溺らさるる者を棄てずして、患難に遇ひし者に援助の手を授け給へ。
潔き者よ、災禍と憂愁とは我に及び、度生の懊惱と誘惑とは徧く我を圍めり。祈る、我を顧みて、爾の堅固なる帷幪を以て我を護り給へ。　光榮
女宰よ、願はくは我爾を暴風の中に港、憂の中に喜と樂、病の中に速なる援助、

患難の中に拯救、誘惑の中に保護として獲ん。　今も
主の火の状の寶座よ、慶べ、神聖なる「マンナ」の壷よ、慶べ、金の燈臺、滅されぬ燈よ、慶べ、處女の光榮と、母の飾及び譽よ、慶べ。

第九歌頌

イルモス、天は懼れ、地の極は驚けり、神は身にて人人に現れ、爾の腹は天より廣き者と爲りたればなり、故に天使と人人の群は爾生神女を崇め讃む。
潔き者よ、我誰にか趨り附かん、何處にか救を得ん、何れにか避所或は篤き保護を求めん、誰をか憂の中に扶助者とせん。我獨爾を恃み、獨爾を以て誇と爲し、爾に賴りて勇みて、爾に趨り附きたり。
神の聘女よ、爾の偉大なるは測り難し。實に神を生みし者よ、愛を以て爾を尊み、信を以て爾に伏拜する者の爲に行はれし智慧に超ゆる爾の奇跡は數へ難し。

光榮

生神女よ、我感謝の歌を以て爾の無量なる慈憐を尊みて讃榮し、爾の大なる力を衆の前に承け認め、我に施しし爾の諸恩を傳へ、靈と、心と、思とを全うして、舌を以て常に爾を崇め讃む。　今も
童貞女よ、我が卑しき祷を受けよ、吾が歎息と涕泣とを忌む勿れ。慈憐なる者として我を護りて、我が願を應はせ給へ。蓋爾若し我が不當にして卑微なるを顧みば、全能の主宰・神の母として能せざるなし。

～～～～～～～～～～

斯の規程(カノン)は凡の憂及び禍より救はれんことを祷る祈祷禮儀(モレベン)に之を歌ふ。又大聖人の祭日の早課に聖人の規程(カノン)と共に歌ふ、生神女に六章、聖人に八章。グレチヤ人は聖人の規程(カノン)と共に時として「イズライリは乾ける地」の規程(カノン)、時として此の規程(カノン)を歌ふ、其欲する所に随ふ。祈祷禮儀(モレベン)にも同じく或は「イズライリは乾ける地」、或は之に代へて此の規程(カノン)を用いる。聖アフォン山には此くの如き風あり。又彼處には毎週間一定の日の晩課の後に衆正教信者の一般の益の爲に祈祷禮儀(モレベン)を歌ひて、此の二の規程(カノン)を更用(かわるがわる)いる。今此の規程(カノン)を欲するに隨ひて用いん爲に之を巻末に附刊す。此を祈祷禮儀(モレベン)に用ひること左の如し。

祈祷禮儀(モレベン)を始むること常の如し。「主よ、我が祷を聽き給へ」の百一の聖詠の後に「主は神なり」、及び常例の諸讃詞(トロパリ)。畢りて後第五十聖詠、「神よ、爾の大なる憐に因りて」。其次に規程(カノン)を歌ふ、諸讃詞(トロパリ)の前の附唱、「至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ」。第三歌頌の後に讃詞(トロパリ)、「生神童貞女よ、爾の諸僕を」、及び「讃美たる生神女よ、慈

憐を以て」。其後聯祷、「我等復又安和にして主に祷らん」。「又吾が今上皇帝云云」、其他。次に祈祷禮儀(モレベン)を賴みたる人の爲に、「神の僕（某、及び其欲する所の者を記憶す）に慈憐生命平安壯健及び諸罪の赦を賜はんが爲に祷る」。主憐めよ、十五次。高聲、「蓋爾は慈憐にして」。坐誦讃詞(セダレン)、「熱切なる祷」。第六歌頌の後に「生神童貞女よ、爾の諸僕」、「讃美たる生神女よ、慈憐を以て」。其後聯祷、若し一般の益の爲に歌ふ時は「我等復又」。「神よ、爾の恩寵を以て我等を佑け」、其他。若し人の依賴に因りて歌ふ時は「我等復又」。「又神の僕（某）」、第三歌頌の後の如し。次に小讃詞(コンダク)、「ハリスティアニン等の辱を得ざる」、提綱(ポロキメン)、「我爾の名を萬世に誌さしめん」。句、「女よ、之を聽き、之を觀、爾の耳を傾けよ」。「我等に聖福音經を聽くを賜ふを主神に祷らん」。福音經はルカの四端、「彼の日マリヤ起ちて」。畢りて後、光榮、「生神女の祈祷に依りて、憐深き主よ、我等の多くの罪を潔め給へ」。今も、同上。其後、「神よ、爾の大なる憐に因りて我を憐み、爾が惠の多きに因りて我の不法を抹し給へ」。次に讃頌(スティヒラ)、「至聖なる女宰よ、我を人の轉達に委ぬる毋れ」。「神よ、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ」。主憐めよ、十二次。「爾が獨生子の仁慈と慈憐と仁愛とに因りてなり」。第八歌頌の前に「我等主を讃め、崇め、伏し拜みて」。イルモス、「聖なる山に光榮を顯し」。第九歌頌の後に「常に福にして」、其他常例の如し。終に聯祷を誦す、「神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ」。「又吾が今上皇帝」、其他。又祈祷禮儀(モレベン)を賴みたる人の爲に祷る、上に記ししが如し。次に「又此の都邑と凡の都邑と地方が」。主憐めよ、四十次。高聲、「神我が救世主、地の四極」、及び常例の發放詞。

第三及び第六歌頌の後に左の讃詞。

生神童貞女よ、爾の諸僕を災禍より救ひ給へ、我等皆爾を破られぬ墻及び轉達として、神の次に爾に趨り附けばなり。

讃美たる生神女よ、慈憐を以て我が肉體の甚しき不能を顧み、我が靈の病を醫し給へ。

坐誦讃詞、第二調。

熱切なる祷、壊られぬ墻、慈憐の泉、世界の避所たる女宰生神女、獨速に轉達する者よ、我等切に爾に呼ぶ、急ぎて我等を諸難より救ひ給へ。

第六歌頌の後に小讃詞、第六調。

「ハリスティアニン」等の辱を得ざる轉達、造物主の前に變らざる中保よ、罪なる者の祷の聲を斥くる勿れ、仁慈なるに因りて速に我等を助け給へ。蓋我等切に爾に呼ぶ、生神女よ、爾を尊む者に常に代りて、急ぎて祷り、切に求め給へ。

讃頌、第六調。

至聖なる女宰よ、我を人の轉達に委ぬる母れ、爾の僕の祷を納れ給へ、蓋憂は我を圍み、我悪鬼の矢を忍ぶ能はず。我不當の者には帷幪もなく、趨り附く處もなし、常に勝たれて、慰藉を得ず。世界の女宰、信者の恃望と轉達よ、我唯爾を恃む、我が祷を忌む勿くして、之を我が爲に益ある者と爲し給へ。